九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

鷲崎文三『回顧録』：1876-1930 ： 明治・大正期における鉄道技師の半生

鷲崎, 俊太郎
九州大学大学院経済学研究院 ： 准教授

https://doi.org/10.15017/19157

出版情報：經濟學研究. 77 (4), pp.109-141, 2011-01-20. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：

(資　料)

鷲崎文三『回顧録』：1876－1930

── 明治・大正期における鉄道技師の半生 ──

鷲　崎　俊太郎

本資料紹介では、私の曾祖父・鷲崎文三が明治・大正期に鉄道技師として28年間の任務を全うし、閑居するまでの半生を振り返った『回顧録』を紹介する。

文三は、西南戦争が勃発する前年の1876（明治９）年、佐賀県佐賀郡兵庫村字藤木[1)]に生まれた。佐賀市内の旧制中学を出て上京し、当時は蔵前にあった東京工業学校の機械科に進学した。1896（明治29）年に同校を卒業後、筑豊鉄道に技師として就職するものの、２年を待たずして北海道へ渡航、以後18年と10か月もの間、道内の鉄道技師として勤務し続けた。40歳代になって本州および九州島内の運輸業務に従事し、高等官三等一級俸の地位まで昇進したが、1924（大正13）年に健康上の理由により50歳を待たずして早々に依願退職している。その後、郷里の佐賀へ帰るものの、三男の進学問題に突きあたり、50歳代半ばを迎えた1930（昭和５）年に再び上京、東京の郊外において一家揃って生活することになった。やがて太平洋戦争が始まると、戦況の悪化に伴って東京を離れて長男宅の山口市へ疎開した。終戦したとはいうものの、直ちに帰京するどころか、近県へ旅行すらもできない現状が続いたため、1946（昭和21）年６月、徒然なるままに『回顧録』の執筆を開始したとある。その後、再び東京へ戻った文三は、武蔵野の自宅を終の住処として余生を過ごし、高度成長真っ只中の1965（昭和40）年、暮れも押し迫った12月28日、89年の天寿を全うした。

文三の死後、その遺品の大半は処分されたが、『回顧録』だけは偶然にも世紀を跨いで今日まで良好な状態を保ちながら２冊残されている。うち１冊は、文三の妻八重から三男・良三に手渡された模様で、良三の妻・美智子が長らく保管していた。近年、美智子が、甥にあたる文三四男・雄四郎の長男・早雄（すなわち私の父）に『回顧録』の存在を伝えて託し、さらに私が先般、父からこれを譲り受けた。もう１冊は、文三の長男・文雄によって長らく保管されていたもので、文雄の死後、遺族に預けられたのち、今回の『回顧録』復刻にあたって、やはり私の父・早雄に寄託されたものである。はたして２冊の『回顧録』が揃って机上に並ぶのは何十年ぶりのことなのか ── と考えると、感慨無量の面持を隠しきれない。

双方の内容を比較してみると、長男保管の『回顧録』は、三男保管のそれよりも、表紙を附していたり、おそらく後年になって若干の記述を補充していたりする点で、より新しいものだと推定される。

謝辞　中村尚史教授（東京大学社会科学研究所）からは、帝国鉄道協会会員名簿データベースより鷲崎文三に関する情報の提供を受けた。また文献収集に際しては、九州大学経済学部経済・経営学科３年生の岩切瑞輝さん、中村真莉さん（ともに鷲崎ゼミナール２期生）の助力を得た。この場を借りて深く感謝の意を示したい。

そこで、以後は前者を改訂版、後者を初版と名付けると、本資料紹介では、私が先に取得した初版の復刻を行い、改訂版については、紙幅の都合上、巻号を改めて掲載することにしたい。

さて、『回顧録』初版[2)]は、縦書き13行で両面印刷されたＢ５版の便箋28枚から成り立っている。この便箋には元々マス目が無かったものの、文三は手ずから１行を33等分して横向きに罫線を引き、原稿用紙の如く１字１句マス目からはみ出すことなく書き綴っている（図１）。しかも、その罫線はきわめて強い筆圧で引かれていたので、裏面に改めて罫線を引く必要はなかった。このような几帳面で且つ合理的な書き方は、いかにも技術者として生きてきた性格を反映しているといえよう。

さて、『回顧録』の文章構成は、まえがき、本論、略歴の三部に大別される。本論は、文三の半生を就学別・勤務地別に、「１．少年時代」、「２．中学時代」、「３．蔵前時代」、「４．若松・直方時代」、「５．旭川・釧路時代」、「６．札幌時代」、「７．釧路時代」、「８．岡山・熊本時代」、「９．佐賀時代」と、９つの章を立てるとともに、本文を締め括るうえで「注意事項」という終章を掲げている。ここで、本論の内容を掻い摘んでおこう。

「１．少年時代（明治９～21年）」は、誕生から佐賀中学に入学するまでの幼少期を記したものである。しかし、その大半を家庭環境や倹素質実に至った背景に費やしている。

「２．中学時代（明治21～26年）」は、主として中学在学時に降りかかった２つの問題を採り上げている。ひとつは、生家の大串家から母方の実家である鷲崎家への養子問題である。大串家という旧佐賀藩士の三男坊だった文三は、養子に対する抵抗感を持たなかったものの、実父と養父の内面的相違を殊更に強調して書いている。すなわち、叔父で佐賀県小城警察署長を勤めていた養父の鷲崎頼之は「磊落不羈（らいらくふき）」で「経済上ノ事ニ就テハ頗ル無頓着」な性格だったために、せっかく大串家の勧めにより、昔の禄で買い入れた水田をも既に手放してしまったそうである。そのことが、いまひとつの中学卒業後の進路問題に関係していた。つまり、養子先の家計が高等学校及び大学進学までの経済的な余裕を持たない以上、早く就職して「実地ノ学問」を身に付ける道を選択せざるをえなかった。そこで、文三は東京工業学校機械科への進学を決意し、無試験にて入学の許可を受けた。

「３．蔵前時代（明治26～29年）」は、東京での学生生活を綴っているが、勉強のことよりも、むしろ下宿先での思い出話や諸先生の四方山話に花を咲かせている。ただし、ここで重要なのは、田中冨士太氐と知り合ったことである。田中は大串家の親戚筋に生まれ、当時農商務省の青年技師として指導的立場にあった。この田中との出会いが、のちに文三を北海道鉄道部の技師へと導いていくことになる。さて、最終学年ともなると就職活動が待っているが、工業化の著しい日清戦後経営期の当時は、技術者の需要が高く、就職口も、今日では羨ましいほど、望み次第だった。とはいえ、紡績業界は「入社後一年位ヒハ女工同様一昼夜交代ヲセネバナランノデ」、あまり健康面に不安を抱えていると躊躇せざるをえず、また先生からビール業界への入社を薦められたものの、「若シ此会社ニ入社後失敗デモスレバ困ルダロウ」と乗る気でなかった。それよりも「多数ノ大会社ガアッテ相競ッテ線路ヲ増設スルニ従ヒ益々技術者ヲ必要トスル」鉄道業界のほうが「将来ハ有望ナルモノ」と見込みをつけ、郷里に近い筑豊鉄道会社への入社を決めた。なお、ビール会社にせよ、鉄道会社にせよ、工業学校の卒業生が現役生を自社に就職するよう勧誘しに来ている事実は、当時から学歴によるタテの連係が密

接に見られている点で、非常におもしろい。

次章以降は、鉄道技師としてのエピソードを描写している。「４．若松・直方時代（明治30～31年）」では、筑豊鉄道に入社し、まず若松機関庫で運転事務の見習を半年間経験したのち、直方機関庫の主任として順調な「技士」生活を過ごしていた。そこへ、先述の田中富士太氏から北海道鉄道部での仕事を持ちかけられた。文三はその話に大変興味を示し、両親・祖母の承諾を得て、九州から北海道へと旅立っていく。

「５．旭川・釧路時代（明治31～40年）」と「６．札幌時代（明治40～大正３年）」、「７．釧路時代（大正３～５年）」の３章では、18年10か月間にも及ぶ北海道での勤務体験が著述されている。他章と比較すると、仕事内容に関する内容が多いのも特徴的である。1901（明治34）年秋、連結作業の職務中に突然機関車が動き出して九死に一生を得た話、あるいは1905（明治38）年、北海道鉄道部が鉄道作業局へ吸収されたことに伴い、文三自身も高等官から雇員へ格下げを言い渡された時の屈辱感などは、技師本人ならではの表現で満ちあふれている。これとは対照的に、雇員の時期に『鉄道時報』という有力な鉄道専門雑誌で募集された懸賞論文に当選した結果、技師に復活できたという逸話、あるいは1908（明治41）年度における車両修繕費の予算増額を請求する際、上京して北海道帝国鉄道管理局の野村弥三郎局長と一緒に本院の島安次郎工作課長を説得した成功談からは、比較的若年齢の技師だったにも関わらず、運転・運輸部門の重要任務の数々を託された自信と誇りが大いに感じられよう。島安次郎が懸賞論文の審査員であり、野村弥三郎がのちに体調不良を起こす文三を気遣って北海道から岡山への転勤を斡旋する上司だった点を踏まえると、こうした勅任官クラスの幹部との懇意な関係の構築は、文三の鉄道技師人生にとって非常に幸運だったと判断できる。

「８．岡山・熊本時代（大正６～12年）」、「９．佐賀時代（大正12～昭和５年）」には、本州・九州への転勤から休職・退官を経て、郷里の佐賀に隠居するまでの内容が書かれている。岡山でも、熊本でも、運輸事務所長という栄えある管理職の任務に就いていたが、「何等特別ナル事務ニ従事セザリシタメ特記スルコトハナイ」と、本音を吐露している。それだけ、北海道での勤務が苦労とともに充実していたことを物語っていよう。さて、この時期から文三の関心事は急速に子供への躾や家庭教育に傾斜していく。激務に従事できずに鉄道界を引退するにあたって、女子１人と男子４人を養育するのに最適な場所はどこか ── それが、郷里の佐賀だった。この目論見は、冒頭でも述べたとおり、三男・良三の音楽家への志望によって脆くも崩れ去ってしまうのだが、その三男の進学にあわせて一家総出で上京するあたりに、文三自身の蔵前時代に対する反省と家庭教育に対する集大成が凝縮されているようにも思われる。

終章の「注意事項」には、文三がその半生を振り返って８つの注意点を掲げている。その内容は、「倹素質実ナルコト」、「全力ヲ集中スルコト」、「酒・煙草ニ就テ」、「家庭教育ニ就テ」などの一般論から、「無理ヲナサザルコト」、「禍ヲ転ジテ福トナスコト」、「部下ヲ信用スルニ注意ヲ要スルコト」、「上役ニ対スル態度ニ就テ」といった中間管理職の経験者ならではの提言も付け加えられていて、実に興味深い。

私が『回顧録』を読み始めるまでは、その内容はおそらく文三の個人的なエピソードに終始したも

のだと高を括っていたが、熟読していくにつれて、その期待は良い意味で裏切られていった。すなわち、それは単に私自身のルーツを辿るための素材を提供するのみならず、日本の近代化が大きく進捗した日清戦後期～両大戦間期に、一人の鉄道技師が黙々とその任務を着実にこなしていった生き様を丁寧に叙述しているからである。

このように、明治・大正期における一介の鉄道技師が自らの職業体験を記録した史料自体、実のところ近代日本鉄道史においてもきわめて珍しい。近年この分野の研究者として名高い中村尚史も、その著書の中で主張しているように、鉄道史のなかでも、とりわけ労働史の研究は、従来から機関手や機械工、土木作業員といった労働者層の研究に集中してきたのに対して、技術者や事務系職員、運行管理者といった職員層に関する研究は、彼らに関する史料不足の影響も手伝って、手薄な状態にあるという[3)]。それに加えて、個別産業の事例に即した、技術者集団の動態的な分析は、日本では未だ開拓されていない分野だといわれている[4)]。以上の研究状況を鑑みると、この『回顧録』を私の書棚に封じ込めてしまうのは、経済史研究者としても誠に忍びがたい。それよりも、これを復刻し、公刊することによって学界に貢献できるのであれば、私自身も、そしておそらく著者の文三自身も本望だと思った次第である。

たしかに、この『回顧録』には、些かプライベートな記述も散見される。とりわけ、あえて終章に設けられた「注意事項」の内容には、後胤として耳の痛い事柄も掲げられている。そうした些細な事項まで逐一活字化すべきものか、判断に迷わなかったわけではない。しかし、我々経済史家は、これまで数限りない史料所蔵者から貴重な文書を拝借してきては、そうした恩人の祖先の過去を悉く公に暴露することによって、学問の発展に努めてきた。したがって、経済史家が提供する史料に限って私事を削除するのは筋違いであろうし、そのような行為によって『回顧録』の持つ史料的価値を大きく減退させてはならない。これらの理由により、ここに『回顧録』の全文を復刻させるに至ったわけである。

なお、復刻にあたり、できるだけ原著の表記に対して忠実な再現を行うよう努めたが、以下の点については、私が加筆・修正を施した。あらかじめご了承願いたい。①フリガナ、章見出しの元号は、紹介者自身の手に拠る；②原著では何か所か文面を訂正した足跡が窺えるが、本資料紹介では訂正後の文面のみを掲載した；③原著では段落の冒頭が一字分下げられていないが、本資料紹介では、紹介者が読みやすくするために一字分下げている；④必要に応じて、紹介者が句読点を挿入した；⑤できるだけ常用漢字を使用した。

自　序

昭和二〇年二月東京ヲ疎開シ、山口市（長男宅）ニ転居以来殆ンド一年有半、終戦ヨリ数エ既ニ十ヶ月ヲ経過シタルガ、戦後、全国的食糧情勢ハ未ダ余ヲシテ東京ニ復帰セシメザルノミナラズ、近県エ、旅行スラモ容易ニナシ能ワシメザル現状ニアリテハ、余ハ恰モコノ小郡市ニ監禁セシメラレタルガ如キ有様ニテ、斯（カク）ノ如キ場合ニ就テハ余ノ如キ老人ニハ、晴耕雨読ハ絶好ノ機会ナルガ如キモ、余ハ元来蒲柳（ホリュウ）ノ質ニシテ永クテ六十才位ヒマデノ生命ナラント思ワレシガ、既ニ夫レヨリ十年ヲ経過シ現在七一才ノ高齢ニ達シ、遠カラズ此世ヲ辞セントスルモノニシテ、体力全ク之レニ伴ワズサリトテ他ニナスベキコトモナク、不自由ナル身体ヲモテアマシツツ徒然ノ余リ執筆シタルモノガ、此回顧録ノ様ナ自叙伝ノ様ナ妙ナモノトナリシモノニシテ、勿論何等ノ目的ヲ有スルモノニアラザルモ、後世余ノ子孫タルモノハ之レヲ見テ処世上ノ参考ニ供スルトキ、ソコニ何等カノ得ルトコロナキニシモアラザルヨウナ、少ナクトモ老人ノ寝言トシテ黙殺デキナイヨウナ気持ヲナスモノデアル。

昭和二一年六月

山口市法泉院西滝

鷲　崎　文　三

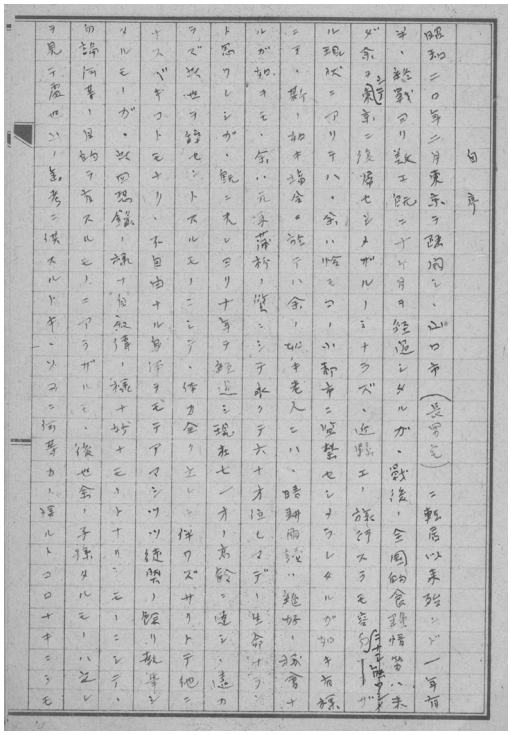


図１　鷲崎文三『回顧録』初版の原稿

一　少年時代（明治九～二一年）

明治九年一月一三日、大串清一郎三男トシテ、佐賀県佐賀郡兵庫村字藤木ニ生ル。旧幕時代大串家ハ手明鎗[5]ノ家柄トシテ代々旧鍋島藩主ニ仕エシガ、祖父（祖父以前ハ略ス）早世シタルタメ、祖母ハ漸ク二五、六方ニテ寡婦トナリ幼年ノ父ヲ伴ヒ、実兄挽地寛六氏宅ノ西隣ニ小住宅ヲ建築シ、寛六氏（以下大伯父ト称ス）ノ指導ヲ受ケツツ父ヲ養育セシモノノ如シ。明治戊辰ノ際若年ノ父ガ旧藩主ニ従ヒ奥羽戦争ニ従事セシ時ノ如キ、一人子ヲ戦場ニ送リシ寡婦トシテ、相当ノ苦痛アリシナランモ、性気概ニ富ミ且ツ勤王ノ志篤キ女丈夫（ジョジョウフ）型ノ、然カモ旧藩時代ノ女大学式教育ヲ受ケシ人ナリシカバ、今時ノ人ガ想像スルヤウナコトナク案外平気ナリシト言ヒ伝エラレテオル。大伯父ハコレマタ聡明寛仁ノ人ニシテ、余ノ少年時代ニハコノ大伯父ヨリ可愛ガラレ、且ツ教養ヲ受ケタルコトノ多大ナリシヲ記憶ス。父ハ正直無私ノ人ナリシモ、ドチラカト言フト活動家ニアラザリシタメ、明治維新直後ノ士族多数ガ没落シタル将ノ如キ、父モマタ生業ノ已ムナキニ至リ、一家ノ生活費ハ所有セル水田（之レハ祖母ガ昔ノ禄ニテ買入レシモノ）ノ小作料ヲ主トスル有様ニテ、加フルニ弟妹引続キ出生シテ、家族多数トナルニ従ヒ、食フニ困ルヤウナコトハナキニシテモ決シテ余裕アルニアラズ、我々兄弟ノ学校教育ノ如キモ先ヅ自宅ヨリ通学ノ出来ル中学ヲ卒業セシメラルル位ガ関ノ山ナリシト思ワレタ。

余ハ以上記シタル如キ家庭ニ於テ生長スルニ従ヒ、両親ヨリ重大ナル感化ヲ受ケタルコトガアル。ソレハ両親トモ倹素質実デアッタノデ、余ハ知ラヌ間ニコレラ体得シタルコトヲ言フノデアル。コレハ決シテ吝嗇（リンショク）ニハアラズ其証拠ニ大串家ハ神社仏閣ニ対スル寄付金トカ、村内ノ貧困者ニ対スル救済又ハ近隣トノ交際ニ於テモ衆目ノ見ルトコロ、決テ家柄又ハ身分以下ト思ワレルヨウナコトハナカッタ。ココニ余ガ今ニ記憶スルコレ等ニ関スル一、二ノ実例ヲ挙グレバ一、余ガ少年時代村デハ各戸トモ少許（ショウキョ）ノ養蚕ヲナスガ殆ンド習慣デアッタガ、家デハ重（ママ）モニ母ガコレヲ担当シテイタガ桑ノ葉ヲ摘取ルニ誰レデモ少許ノ摘残シヲスルノハ普通デアルガ、母ガ摘取リタルモノニ限リ一葉ノ摘残シモナカッタ。(之レハ母ガ努力シテ摘残シヲシナイノデナク、無意識ニ摘取テモ摘残シガ出来ナイ。）コレハ無駄シナイ一例デアルガコレニ就テハ、サスガノ大伯父モ感心シテイタヤウデアル。次ニ二、村内ノ人ガ時々小金ヲ借リニ来タコトガアルガ、ソンナ時ニハ父ハ其利息ヲ規定通リニ取ラズニ必ズ幾分カヲマケテイタ。其頃アル年末ノ大晦日ニ村ノ人ガ借金ヲ返シニ来テ父ガ例ノ通リ、利息ノ幾分カヲマケタノデ喜ンデ帰ッタコトヲ、余ハ今ニ記憶シテイル。(蓋シソノ日ハ大雪降リノ悪天候ナリシ故祖母ガコノ人ニ「オ天気ガ悪ルカノマイ」ト挨拶シタルニ対シ、此人ハ「コンナ天気デヤア借金取リガコンケンヨカバンタア」ト脱線シテ、直チニシマッタト言フテ頭ヲ掻イタノデ大笑ヒトナッタコトガアルガ、余ハ今ニコレヲ忘レナイ。）コレハ吝嗇デナイ一例ニ過ギナイガ要スルニ吝嗇デナク無駄ニシナイ、物事ヲ総テ丁寧ニ取扱フト言フコトハ、人間生活上最重要ナル注意事項ノ一ニシテ、余ハ両親ノコレヲ完全ニ受ツイダノデアル。

斯ノ如キコトヲ言フト、ソンナコトハ誰レデモ知ッテイルトカ、多忙デソコマデ手ガマワラヌトカ、ソンナ小サナコトヨリカ積極的ニ収入ヲ増ス方法ヲ研究スルノガヨイト言ッテ、簡単ニカタヅケル人ガアルガ、コレラハ不憫ニモ其実質ヲ知ラザルモノデ、個人ハモトヨリ大会社モコレニヨリ発展シ、

国家モコレニヨリ繁栄スルモノデアッテ、国民ノ文化高ケレバ高キ程無駄セザルモノデアル。余ハ両親ノ感化ニヨリ此事ガ深クシミコンデイルトミエ、コレニ反シタダラシナイ行為ハ見ル丈デモ不快ヲ感ズルヨウニナッテシマッタ。尚ホ此事ニ就テハ此書ノ終リニ其実例逆ニ余ノ生活ニ与エタル影響等ニ就テ、詳細ニ記載スルコトニシ、爰(ココ)ニハ両親ヨリノ此贈物ガ如何ニ貴ク偉大デアッタカト言フコトヲ記スルニ止ムルモノデアル。

余ハ斯ノ如ク、家庭ニ於テハ両親ノ感化並ニ両親ノミナラズ、賢明ナル祖母及大伯父ノ慈悲及教養ヲ受ケツツ、学齢ニ達スルヤ村ノ小学校ニ入学セシメラレタ[6]。小学校在学中ノ余ノ成績ハ中以上ニシテ同級生ヲ甲乙丙ノ三等ニ分ツ時ハ、先ヅ甲ノ下ト言フトコロデ一、二番ニハ一回モナレナカッタガ、サリトテ中位ニ落チタコトモコレマタ一回モナカッタ。学校ハ田舎トシテハ隣村ニ比シ優良校デ、余ノ在学中一、三回行ワレタル隣村校トノ聯合試験（当時県令カ郡長カノ命令ニヨリ時々行ワレシモノニシテ其目的ハ学校関係者ニ競(ママ)走心ヲ起サシメルタメト思ワル）アリシ時ノ如キモ、首席ヨリ三、四席マデハ我校ニ於テ之レヲ占メ、隣村校ノ首席ハ我校ノ四、五番ニ匹敵スル位ヒノ成績ニテ、中学エノ入学率ノ如キ他ノ田舎ノ小学ニ比スレバヨロシク、此点余ニハ仕合(シアワセ)デアッタト思フ。之レ全ク村当番ノ学校管理宜シキヲ得タルタメト言ワザルベカラズ。蓋シ其頃、兵庫村ニハ優秀ナル指導者、乏シカラズ、然シテ前記ノ大伯父ノ如キハ其内ノ一人ト言フヨリモ之レハ寧ロ此等ノ村長始メ指導者ノ名誉顧問ト言フ有様ニテ、自分ハ老齢ノタメ成ルベク責任アル地位ニハ就カザリシモ、何カ村デ新問題起レバ村当番ハ先ヅ大伯父の意見ヲ聞クト言フ有様ニテ、村長、兵庫村出身、代議士、県会議員等ノ如キモ之レガタメ時々大伯父宅ヲ訪問セシモノノ如ク村ノ小学校ノ優秀ナリシモ大伯父（当町学務委員）指導ノ効果大ナリシモノト思ワレタ。

明治二一年七月、佐賀中学[7]ニ、入学試験ヲ受ケ入学ヲ許可セラレタルガ、ソノ頃ノ田舎デハ小学校卒業後ハ、大部分学校ヲヤメテ農業ニ従事スルノガ普通デ、兵庫村ニ於テモソノ時ノ中学入学試験者ハ僅カ四、五名ナリシト思フガ、其内入学ヲ許サレタルモノハ余ノ外ニ一人ナリシト記憶ス。実ハ余モコノ入学試験ニテ余ニハ比較的得意トスル数学ノ成績不良ナリシタメ、入学ハダメダト思ッタガ数学成績ハ余ノミナラズ一般ニ不良ニシテ、コノ儘(ママ)デハ採用予定人員数ニ達セザリシタメ（数学成績ノ一般ニ不良ナリシハ問題中ニ題意ヲ誤解シ安キモノアリシタメニシテ一般ガ劣等ト言フノデハナカッタヨウダ）特別ノ取扱ヒヲナシタル換様ニテ、カクテ余ハ百名中六六番ト言フ余リ芳バシカラザル成績ニテ入学ヲ許サレタ。

二　中学時代（明治二一～二六年）

明治二一年七月、佐賀中学エ入学後ノ成績ハ小学ノ時ニ同ジク、甲ノ下位ヒデ盛ンニ読込式ノ復習ヲナシ二、三番ニナリシコトモアレド、普通ノ復習ニテハ六、七番位ヒデアッタ。元来余ハドチラカト言フト勉強家ノ方デ暇ガアレバ本ヲ見ルト言フ風デ、之レニ就テハ大伯父モ「文三ハ勉強家ダ。藤太郎（長兄）熊次郎（次兄）ハ試験ニ出ソウナ所ダケヲ復習スルガ、文三ハ問題ニ出ヨウガ出マイガソンナ事ハ顧慮セズニ本全部ヲ復習スルカラ慥(タシカ)ナモノダ」ト言ッテイタガ事実余ハ読書ガ嫌ヒデハナ

カッタ。

サテ中学四年級ニナッタ頃ニハソロソロ、卒業後ドウスルカト言フコトニ就テ考エルヨウニナッタガ、前ニモ記シタヨウニ卒業後高等学校大学ト進ムニハ学費ノ心配ガアッタ。其頃旧佐賀藩主鍋島侯爵家ヨリ毎年中学卒業生ノ、成績優秀ニシテ学費ナキモノ四、五名ノ学費ヲ出シテクレテイタガ、其内半数ハ陸海軍将校養成ノ目的ナリシ故、高等学校志願者ハ一番カ二番マデニナラネバ此恩典ニ浴スルコトハ出来ナカッタ。夫レデ此恩典ニ浴シタイト思フ人ハ随分過度ノ勉強ヲナシ身体ヲコワスモノモアッタ。余ハ勉強次第デハ五、六番マデノ自信ハアッタガ一、二番ニナル自信ハナカッタ。ソシテ前記ノ通リ余ハ蒲柳ノ質デ軍人ニハ不向デアッタノデ、卒業後ノコトニ就テ心配セザルヲ得ナカッタノデアル。

然シテ其頃余ニハ鷲崎家ニ養子ニ行ケト言フ問題モ起ッタ。鷲崎家ト言フノハ母ノ里ニテ当時ノ戸主ハ母ノ弟ニ当ル鷲崎頼之ニテ、子供ガナカッタ。挽地ノ大伯父ニモ小供(ママ)ガナカッタガコレニハ次兄ガ養子ニ行ッタノデ鷲崎家ノ養子ニハ余ガ行クノガ順序デアッタ。然シテ伯父ハ其頃佐賀県警部デ小城警察署長ヲ勤メテイタガ、高知県吾川(アガワ)警察署長ニ転勤スルコトニナッテイタノデ、可成赴任前ニ戸籍上ノ手続ヲシタイト言フ。余ノ方デモ養子ニ行クトスレバ中学卒業前ニ行キ卒業証書ノ名前ガ、転籍後ノ名前ニナルノガ宜シイノデ、養子ニ行ケバ将来ドンナ利害関係アルヤナドニ就テハ若年ノ余ニハ全然思ヒ浮バズ。全ク親ノ言フ儘ニ明治二五年カ六年ノ初メニ転籍シタ様ダ。

前記ノ次第デ転籍シ其後ハ鷲崎性(ママ)ヲ用ユルコトニナッタトハ言エ、養父ハ直チニ高知県ニ赴任シタルタメ、余ハ大串家ノ一人ト何等変リタルコトナク中学卒業後ノコトニ就テハ、養父ヨリモ実父ヨリモ何等ノ話モナカッタ。コノ事ニ就テハ両親トモ余ガ何カ希望ヲ言ヒ出スノヲ待ッテイタカモシレナイ。元来養父ハ兄弟ナル余ノ母トハ異ナリ寧ロ磊落不羈(ライラクフキ)ニシテ明治二五年松方内閣時代、政府ノ秘密命令ニヨルトハ言エ小城警察署長トシテ衆議院議員選挙ニ大干渉ヲナシ、遂ニ小城ヲ地盤トセル自由党ノ名士松田正久[8]ヲ落選セシメタルガ如キ不都合ナドナキニシモアラザリシモ[9]、マタ其頃各地ニ勃発セル水田用水引入ニ関スル農村間ノ大騒動ヲ鎮撫スルトキノ如キ、独特ノ手腕アリシハ衆目ノ見ルトコロデアッタ。シカシ経済上ノ事ニ就テハ頗ル無頓着ニテ、佐賀警察署次席警部ノ如キ小役人デアリナガラ、自家用乗馬ヲ置キ従ッテ馬丁ヲ傭入レ、尚ホソノ外ニ子供ナシノ家庭デアリナガラ女中ヲ置クト言フ有様ニテ（尤モ当時ハ中学校ノ校長ニテ自家用人力車ヲ置キシモノガアッタ時代ダカラ現今トハ比較ニナラズ)、折角大串家ノ勧メニヨリ昔ノ禄ニテ買入レタ水田モ其頃ハ皆無ナリ(ママ)レト思ワレタ。コウ言フ具合デアッタカラ余ヲ大学マデ進マシメル丈ノ余裕ハナカッタヨウデアル。夫レデ余ハ色々ト熟慮シタル結果数学物理ナドノ成績良好ナリシテ幸ヒ、之等ノ学科ヲ基礎学科トスル修学年限三年程度ノ蔵前工業学校[10]ニ入学スルコトニ決シ、養父及実父ノ承認ヲ得タノデアル。コノコトヲ決定シテ中学校ノ校長ニ報告シタルニ校長ハソレハ高等学校ノ方ガヨカッタノニト言フテイタ。実ハ余モ学費ノ方ハ少々無理ヲシテモラッテ高等学校工科大学ト進ンデミタイト思ワヌデモナカッタガ、早ク世ノ中ニ出テ実地ノ学問ヲスレバ其心掛次第ニヨリ必ズシモ大学ニ入ル必要ナキモノト堅ク信ズルニ至ッタカラデモアル。

明治弐六年七月行ワレタル中学卒業試験ハ別ニ変リタルコトナク平凡裡ニ相済ミ直チニ蔵前機械科

ノ方ニ志願シタルニ、数学物理図画等ノ中学卒業成績優良ナリシタメ無試験ニテ入学ノ許可ヲ受ケタ[11]。

余ガ未ダ中学在学中（明治二五年頃ト思フ）、挽地ノ大伯父ハ七三歳ニテ病死シタ。余トシテハセメテ尚ホ四、五年間生キテイテクレタラ報恩ノマネゴト位ヒハ出来タノニト残念デタマラナカッタ。同二六年春養母モ二八才ニテ早世シタ。元来養母ハ体格中以上ニテ虚弱ノ方デハナカッタガ、流行感冒ニ罹（カカ）リ夫レガコジレテ遂ニ肺ヲ冒カサレ余ガ養子ニ行キタル頃ハ、既ニ全治ノ見込ナク里ニテ療養中デアッタノデアル。余ハ養子ニ行ク以前ヨリ伯母トシテ親ミ深ク、相当可愛ガラレテイタヨウデ余ハコノ養母ヲ余ニ対スル行為ニ就テ、不快ニ思ッタコトハ一回モナカッタ。早世シタコトハ誠ニ残念デアッタ。

三　蔵前時代（明治二六～二九年）

蔵前機械科ニ入学ノタメ、明治二六年八月下旬佐賀出発上京スルコトニ決シタガ、余（当時一八才）ハ其時マデ[i]旅行ト言フトタダ一回佐世保ニ、佐世保軍港開港ノ際明治天皇ノ御幸アラセラレタル時、奉迎ノタメ中学生トシテ団体ニテ遠足シタコトガアッタガ、其以外ニハ一回モ県外ニ出タコトモナカッタ。ソレデ可成同行者ガアッタ方ガヨイト思ッタガ余ノ外ニ佐中ヨリ蔵前ニ入学スル永田熊夫氏ハ、家事上ノ都合ニテ既ニ上京済トノコトデ其外ニ誰レカ連レガナイカト心当リテ探シタガナイノデ、一人旅ヲスルコトトナリ、兵庫村ノ呉服商人ニテ常ニ仕入レノタメ京阪地方ニ旅行スル知人ニ就テ、種々旅行上ノ注意事項ヲ聞キ合セ予定ノ日ニ出発シタノデアル。佐賀ヨリ門司マデ汽車、門司ヨリ神戸マデ船、神戸ヨリ東京マデ汽車（当時山陽線鉄道ハ神戸岡山間開通セルノミ[12]）トコウ言フ具合ニ乗換エ、神戸東京間デ、静岡ニ一泊ノ上（前記呉服商人ヨリ一人旅ニテ初メテ上京スル人ハ静岡当リニ一泊ノ上東京ニ昼間ニ着クヨウニスル方ガヨイト聞キシタメ）、東京着ハ午後二時頃デ直チニ親類ナル松尾方ニ腰ヲ下ロシタノデアル。其翌日前記ノ永田氏ヲ訪問シテ差当リ永田氏ノ伯父木下氏宅ニ永田氏ト同宿サセテモラウコトニシ、ソレヨリ二、三日間松尾氏ニ滞在ノ後木下氏ニ引越シ、九月一一日蔵前ニ初昇校ヲシタ。

ソレヨリ木下氏ニ約六ヶ月居タガ、何分小石川ノ同氏宅ヨリ蔵前マデ遠路ナル故、江副ト言フ友人ト両人ニテ浅草ノ素人下宿ニ入リ、ココニ居ルコト六ヶ月ノ後ココノ食事ガ悪ク且ツ不潔ニテ年老イノ婆サンガ水涕（テイ）ヲススリツツ給仕スルノガイヤニナッテ、此度ハ本郷真砂町（マサゴチョウ）[13]ノ[ii]下宿ニ引越シココニ居ルコト十ヶ月ノ後ココデ遊ビ友達ガ余リ殖（フ）エテ勉強ガ出来ナイノデ、下谷西黒門町（ニシクロモンチョウ）[14]ノ下宿ニ移リココニテ火事ニ会（ママ）ヒ、本郷湯島下ノ下宿ニ落付キココニ居ル頃ニ蔵前卒業トナッタノデアル。

蔵前在学中時々松尾宅ヲ訪問シタガ、主人ノ松尾鶴太郎氏（同氏ノ父ト余ノ実父ト従兄弟デアッタ

---

i　当時ハ未タ船車連絡切符ナク又タ急行列車ノ運転等モナク其他旅行ニハ現時ト比較シテ便少ナカラズ。

ii　真砂町ノ下宿屋ニ同宿セル同県人七人トナリ毎日夕食後ハ一室ニ来リトランプヲスルカ又タハ下手ナ音楽会ヲ催シ尺八又ハ其頃流行ノ月琴（ゲッキン）ヲ引クヤラニテ復習ノ時間ナク其結果七人トモ学校ノ成績不良トナリ余モ漸ク中位ヲ保チ得タル位ヒデ之レデハナラントシテ下谷ニ引越シタ。

ト思フ）ハ其当時海軍技師デ英国ニ長期出張中デ余ガ蔵前卒業直前、帰国セラレタ時ニ一回面会センコトアルニ過ギザリシモ、其母お春[iii]サンハ余ヲ快ク迎エテクレ其弟田中冨士太氏ハ当時農商務省ノ青年技師（工学士）ニシテ、余ニハ親切ナル指導者デアッタ。

蔵前在学中ノ成績ハ小学、中学時代ト余リ変リナク甲ノ下位ヒデ特記スルコトモナイノデ、爰ニ少シク諸先生方ノ噂ヲスルト校長手嶋先生[15]ハ、其頃実業教育家ノ第一人者トシテ東京高商ノ矢野校長[16]ト並ビ称セラレタル人格者デ卒業生ノ就職ノ世話ナドハ全ク行届ヒタルモノデアッタ。機械科長坂田博士[17]ノ講義ハ声ガ低クテ閉口シタ。三守教授[18]ノ物理中原博士[19]ノ応用実学ノ講義ハイヅレモサラサラト急流ノヨウデ筆記スルニハ困ッタ。中原博士ハ講義中時々指ヲ自分ノ鼻孔ニ入レテ鼻糞ヲ取出シ、之ヲ丸メテ玉ヲ造リ之レヲ教室ノ窓ヨリ捨テルト言フ癖ガアッタ（コノ人ハ其後九大工学部ノ最初ノ部長トナリ九大工学部ヲ築キ上ゲタル人)、三島医学博士[20](早世シタ）ノ工場衛生ノ講義ハ講義中大ニ滑稽ヲ交エテ、面白オカシク生徒ヲ笑ワセルコトガ得意デアッタ。講義中校長ガ巡視セル時ナド謹厳ナル校長モ必笑ッテ帰ルト言フ具合デアッタ。

前記下宿屋デノ火事ニハ一寸驚カサレタガ、上京前佐賀デ祖母ヨリ東京ハ火事ガ名物ダカラ平素ノ準備ガ必要ダト聞イテイタノデ、毛布大風呂敷帯及ビ細引数本ヲ平素ヨリ用意シテ置イタノデ、直チニソラキタト兼テ練習セン通リ、本ノート衣類夜具等必要品持逃、支度ヲナシ、近所ノ上野広小路ニ避難シタ。夫レデソノ時ハ丁度卒業試験ノ直前ナリシニモ拘ワラズ、少シモ不自由ナク受験スルコトガ出来タノデ、此時同級生等ヨリ見舞金ヲ貰ッタノニハ却テ恐縮シタノデアッタ。此火事デ同宿者中殆ンド全焼シタモノモアリ、余ガ最多ノ持出シテ避難シタモノデアッタ。之レ全ク祖母ヨリノ注意ニテ平素ノ準備ガヨカッタカラト思フノデアル。

三年級ニナッタ頃ニハ、卒業後ノ就職問題ニ就キ愈々真剣ニ考フルヨウニナッタ。其頃ハ明治後半期ノ初期ニ当リ、手工業ガ機械工業ニ転換ノ時代デ技術者ノ需用(ママ)多ク就職口ハ望ミ次第デアッタガ、殊ニ紡績会社ガ各地ニ設立セラレタルタメ、同級生ノ多数ガ紡績ノ方ニ吸収セラレタ。余モ紡績ノ方ヲ考エテミタガ紡績デハ入社後約一年位ヒハ女工同様一昼夜交代ヲセネバナランノデ、余リ壮使(ママ)ナラザル余トシテハ躊躇セザルヲ得ナカッタ。ソノ内ニ坂田先生ヨリ大日本ビール会社ニ入社シテハドウカト言フテキタ。入社条件モ悪クハナカッタ。尚ホ其後間モナク同社ヨリ橋本卯太郎氏（蔵前出二年先輩ニテコノ人ハ後ニ取締役、常務ト出世シタル人[21]）来訪ノ上、入社ヲ勧メラレタガ其頃ビール会社ノ大ナルモノハコノ会社ノミナノデ若シ此会社ニ入社後失敗デモスレバ困ルダロウト思ッタリシテ(今カラ思フト変ナ考)、入社スル気ニナレナカッタ。ソシテ遂ニ郷里ニ近キ筑豊鉄道会社[22]ニ入社スルコトニ決定シタノデアッタ。当時我国鉄道ハ未ダ建設時代ヲ免レズ官設ノ外、私設ノ日本、山陽、九州、関西其他多数ノ大会社ガアッテ相競ッテ線路ヲ増設スルニ従ヒ益々技術者ヲ必要トスルノデ、鉄道ノ将来ハ有望ナルモノト見込ヲツケタカラデアル。ソレデ同郷出身ノ蔵前一年先輩ニシテ同社員

---

iii　松尾ノお春サンハ（夫君ハ佐賀藩屈指ノ人物ナリシテモ早世セシタメ）当時有福(ママ)ナリシ松尾家ノ財産ヲ適当ニ処理シタリシノミナラズ子供ノ躾ケモ全ク行届ヒタモノデアッタソウデアル。余ガ脚気デ大学病院ニ入院中見舞ニ来ラレタ時、看護婦連中ガイマノハドコノ貴婦人デスカト聞イタ事ガアルガ之レハ全クソノドコトナク上品ナ姿ニ打タレタタメデアル。右ノ通リ松尾家ハ有福(ママ)ナリシモ生活ハ全ク倹素質実デアッタヤウダ。

ナル多々良信二氏[23]ニ直チニ採用決定セラレタノデアル。斯ノ如ク就職問題ハ簡単ニ解決セラレタルガ、余ハ此年卒業前後ヨリ少々脚気ノ気味ニテ医師ノ診断ニ依レバ熱ノナイ脚気ダカラ心配ハナイガ此際ニ帰郷静養シタルニ約三ヶ月ニテ恢復シタルモ既ニ年末ニ近ヅキンタメ一層此際呑気ニト正月ヲ郷里ニテ迎エタノデアル[24]。

四　若松・直方時代（明治三十～三一年）

明治三〇年二月一日余ハ年齢二二才ニテ、筑豊鉄道会社技士トシテ月俸二五円ヲ支給サレルコトニナッタノデアル。賞典ヲ合セバ月三五円位ヒノ収入トナリ之レニテ少シモ不足ハナカッタ[25]。（当時ハ小学校長ノ月俸ガ十二円巡査ノ初任給ガ八円下宿料七円位）多々良技士指導ノモトニ若松機関庫ニ於テ運転事務ノ見習ヲシタ。多々良氏ハ豪傑肌ノ金使ヒノ荒キ人デアッタノデ、余ニハ感心出来ザルコトモアッタガマタ一面相当親切ナル人ニテ、氏ノ指導ヲ受ケタルコトヲ多トスルモノデアル。然シテ約六ヶ月ノ後直方機関庫主任トナッタガ二二才ノ主任デハ、機関手以下多数ノ人ノ監督上不行届ノ点アリシナランモ当時ハ現今ト異ナリ、未ダ封建的色彩濃厚ナリシ時代ナレバソレ程ノ事モナカッタヤウデアル。余ハ就職以来仕事ヲスルト言フヨリモ仕事ヲ覚エルト言フ気持デ勤メテイタガ此考ハヨカッタヨウデアル。此気持デアッタカラ仕事ヲ早ク覚エタノミナラズ、生意気ニモ見エズ仕事ノ成績モ自然ニ上ッタヨウデアッタ。

斯クシテ直方ニ転勤後約一年ヲ経過シ、仕事ノ方面白ク益々油ガノッタ頃、前ニ記シタコトアル田中冨士太氏（当時北海道鉄道部汽車課長[26]）ヨリ突然北海道ニコナイカト言フテキタ。給料ハ五割増其他種々好条件ガアッタ。ノミナラズ北海道ヲ開拓スルタメ道内全区域ニ、鉄道ヲ普及セシムル計画ガ既ニキマッテオルカラ将来大ニ有望トノ事デアッタ。然シ余ニハ郷里ニ遠クナルシ（其頃九州デハ北海道ニ行クニハ水盃（ミズサカズキ）ヲスルト言フ程ニ遠ク思ワレテイタ）且ツ北海道デ生活スルノガツマランデハナイカト言フヨウナ気持ヲシテ、決シ兼テイタガ其後同氏ヨリ近日中ニ神戸マデ行クカラ君モ神戸マデコナイカト言フテキタ。ソレデ日取リヲ打合セテ神戸ニ行キ種々北海道鉄道ニ関スル話ヲ聞イタガ、如何ニモ面白ソウナノデ郷里ノ親ニ相談シテ許ヲ得レバ行クト言フコトニ、打合セテ帰ッタノデアル。ソレカラ佐賀ニ行キ、相談シタルニ両親トモ快ク承認シテクレタルノミナラズ、祖母マデガ「松尾ノオ春サンガ子供サンヲヤッテゴザリヤア、オ前モイタテヨカタイ」ト案外簡単ニ承知シテクレタ。

右ノ次第ニテ愈々九州ノ鉄道ヲ罷メテ北海道ニ行ク準備ヲ進メタガ、何ンダカ北海道ニ島流シサレル様ナ憂鬱ヲ感ズルノデ、若シコンナ場合同行者アラバ好都合ト思ヒ、サキニ神戸ニテ田中氏ニ会談ノ際同氏ヨリ若シ君ノ外ニ君ト類似セル経歴アル人ニテ、希望者アラバ就職口ハイクラデモアルカラ同行差支エナシト言ワレタルコトヲ思出シ、其当時直方ノ近所ニアル幸袋（コウブクロ）工作所[27]ニ勤務中ノ林清憲氏（北海道ニ近キ山形県人蔵前同期ニシテ余ノ親友[28]）ニ相談セシニ、同氏モ行キタイトノコトデアッタノデ早速田中氏ニ打合セタルニ歓迎スルトノ返電アリシニヨリ、暫ク同氏ノ出発準備ヲ待チ、同氏ト共ニ明治三一年三月愈々最初ノ就職地トシテ思出深キ北九州ニ別レヲ告ゲタノデアル。

五　旭川・釧路時代（明治三一～四十年）

札幌着後鉄道部員ノ世話ニヨリ投宿シタ下宿屋ヨリ、鉄道部ニ通勤セシコト約四ヶ月ノ後、林君ト相前後シテ旭川ニ転勤トナリ[29]余ハ運転方面ニ林氏ハ工場方面ニ勤務シ、夫レヨリ明治三八年夏釧路ニ転勤、明治四十年秋鉄道国有ノ結果新設サレタル札幌鉄道管理局ニ転勤トナッタ。

右旭川エノ転勤後直チニ林君ト共ニ一流旅館三浦屋ニ下宿シ余ハ毎日機関庫ニ通勤シ仕事ノ方面白ク愉快ニ勤務シテイタガ約一ヶ年後余ノ妻帯問題ガ起ッタ。夫レハ田中氏初メ諸友人ヨリ北海道ハ内地ノヨウニ専門ノ下宿屋モナク、独身ニテノ生活ハ甚ダ不便ダカラ君ハ年ハ未ダ若イガ妻帯シテハドウカト勧メラレタノデアル。トコロデ夏ニハ別ニ不便トモ思ワナカッタガ冬期零下十度二〇度ト言フ時ニストーブナシノ室内ニ寝起キスルコトハ実際苦痛デアッタ。夫レデ林君ハ郷里山形ヨリ夫人ヲ迎エラレタガ、余ハ郷里が遠隔ノ地デアルシ養父ハ其頃台湾ニ勤務中ナノデ、妻帯ノ必要ナルコトヲ書面ニテ双方ニ相談シタルニ、双方ヲ代表シテ実父ヨリ其地ニテ適当ナルモノアラバ結婚シテヨシト言フテキタ。蓋シ前期ノ通リ遠巨離（キョリ）ナル郷里ヨリ斯ノ如キコトヲ取纏メルノハ、容易デハナイト思ッタノデモアロウガ、尚ホ同時ニ余ガ若年ナガラ石橋ヲ叩ヒテ渡ルヨウナ性質デアル事ヲ十分知リヌイテオルカラ、間違ヒナドハ起ラヌモノト確信シテイタカラデモアロウト思フ。ソレデ余モ愈々妻帯スルコトニ決シ田中氏ニ報告シタルニ、氏ハ満足シ殊ニ北海道ニテ妻帯シテモヨイトノコトデ気ニ入ラレタヨウデアッタ。夫レハソノ頃内地ヨリ夫人ヲ迎エタルモノハドウモ北海道ニ落付ズ、辞職シテ内地ニ帰ルト言フ人ガ多カッタカラデアル。

余ガ妻帯ノ意志アルコトヲ知ッタ友人等ハ種々縁談ヲ持ッテキテクレタガ、其中見合ヲナスマデニ至リシモノハ最初小樽ニ相当ノ人ガアルト言フノデ、態々（ワザワザ）小樽ニ行キ見合ヲナシタルニ、友人ノ話ト相異ノ点多カリヲ以テ之レヲ見合セ、次ニ札幌ニ相当ノ候補者ガアルト言フノデ見合ヒヲナシ、ドウシタモノカト決シ兼ツゝ其写眞ヲ入手シ田中氏ニ見セタルニ、氏ハ之レハ体格ニ欠点ハナイカト言フ。成ル程ソウ言ワレテミルト何ダカ身長ノ割合ヒニ痩セテオルヨウデアッタ。其次ニ余ノ先輩ナル栗野定次郎氏（鉄道部保線課長）[30]ヨリ札幌ニテ自分ガ能（ヨ）ク知ッテオル家庭ニ適当ト思ワレルモノガアルガドウカト言フカラ、余モ考エテオッタガ旭川ノ隣村ナル当麻村居住ノ佐賀出身ナル屯田兵下士官嶺川ト言フ人ヨリ、同氏ノ友人ニシテ同ジク佐賀出身ナル富永大尉ノ夫人ノ妹ハドウカト其写真ヲ以テキテクレタガ、段々聞イテミルト夫レガ栗野氏ノ言フノト同一人デアッタ（同一市内ナドデ各方面ヨリノ推薦ノモノガ同一人デアルト言フコトハアルモ、斯ノ如ク関係者ガ一人ハ鉄道技師デ札幌住ヒ一人ハ屯田兵下士官デ旭川隣村住ヒトコウ言フ具合ニ住地モ境遇モ異ナルモノガ、同一人ヲ推薦スルト言フ事ハ全ク意外デアッタ）。然シテ先方ハ未ダ年少ニシテ潮時ヲ過シテ各所ニヤンヤト嫁入口ヲ探シテオルモノトモ見エズ、従テ関係者モ余主トシテ余ニ対スル好意ノ勧メヲナシタルモノト思ワレルノデ余ハ熟考ノ結果之レハ全ク神ノ御指図トシテ形式丈ノ見合セ[iv]ヲナシ別ニ詳細ナル取調ヲナサズソレニ決定シテシマッタノデアル。之レガ即チ老妻ニテ其頃十九才ノ花嫁サンデ時正ニ明治三三年五月余ハ年齢二五才デアッタノデアル。

余ハ学校ヲ出テ就職以来収入ノ約二割ノ貯金ヲシテイタカラ、結婚費用全部ヲ余ノ貯金ニテ支払ヒ

親ヨリハ若干ノ祝金ヲ貰ッタノミニテ別ニ大シタ世話ニナラナカッタ。親ニ願エバ例令遠隔ノ地ニ住ッテイテ感心(ママ)ガ薄ヒニシタトコロデ、費用ノ幾分ヲ出シテクレタト思フモ、余ハ出来ル限リ親ノ厄介ニナラン方針デアッタノデ、此際モ親ニハ依頼シナカッタ。然シ此時ハ費用ノ幾分ヲ友人ヨリ借リタ。当時余ノ月俸ハ五五円賞典ヲ入レテ七十円位ヒデアッタノデ、此借金ヲ返シ得ルノミナラズ其頃デハ妻帯シテ倹素ナル生活ヲナセバ小人(ママ)数ノ内ハ二割位ノ貯金ハ出来タヨウニ思フ。

明治三四年秋余ハ職務中、アブナク大怪我ヲ免レタ事ガアッタ。ソレハ鉄道車輪ノ連結(ママ)機ニ関シ、実知(ママ)取調ノ必要ヲ生ジタノデ旭川駅構内ニ於テ取調中、約二〇輌ヲ連結セル車輌ガ同駅構内何番線カニ止メ置カレテアッタノデ、慥メテミルト此車輌ハ其時其儘止メ置クコトニナッテイタノデ、余ハ其最前部ノ線路中間ニ跪シ左右ニ検車手一名ヅツ控エテ、連結機ヲイヂクッテイタガ何カ行違ヒガアッタトミエテ、其連結車輌ノ後部ニ機関車ヲ連結シテ突然推進シ（テ）キタノデアル。ソレデ両検車手ハ間髪ヲ入レズ夫々線路ノ左右ニ逃ゲタガ、余ハ中間ニ居タタメ左右ニ逃ゲル暇ナク咄嗟ノ間ニ線路ノ中間ニ寝タノデアル。夫レデ余ノ上ヲ連結車輌ガ十輌計リ通過シ時漸ク両検車手ノ合図ガ機関手ニ通ジテ急停車ヲナシタルタメ、余ハ少シノカスリ傷モナク助カッタノデアル。此時若シ停車ガ一寸後レタラ余ハヤラレタト思フ。駅員四五名ハ余ガ全クヤラレタト思ッテ駆付テキタ。コンナコトカラ余ハ万事ニ就テ一層真剣ニ念ニハ念ヲ押ス必要アルコトヲ痛感スルヤウニナッタ。

明治三六年春女子出生ス。榮子ト命名ス。

同年秋実父東京見物ノ序(ツイデ)ヲ以テ北海道マデ足ヲ延バシ五六日間滞在ノ上札幌ヲ経テ帰郷シタガ、其後間モナク病気ニ罹(カカ)リ暫ク療養シタガ其効果ナク、遂ニ年齢五七才ニテ病死シタ。誠ニ遺憾至極デアッタ。余ハ遠隔ノ地ニアッテ親シク看病モ出来ザリシタメ夫レヨリ約三〇日後（役所ノ都合デ後レタ）、墓参ノタメ妻子ヲ伴ヒ帰省シ序ニ少シユックリシタカッタガ、其時分日露ノ風雲愈々急ニシテ遂ヒニ上官ノ命ニ依リ急ヒデ帰任シ、直チニ第七師団ノ輸送其他コレニ関スル事務ニ従事シタ。

明治三八年四月ヨリ、北海道鉄道部ハ鉄道作業局ニ合併セラレタルガ[31]、此合併ノタメ余ニハ一寸不仕合セナル事件ガ起ッタ。夫レハ其頃余ノ蔵前同期ノモノハ皆ナ判任官[32]四級以下ナルニ、余一人技師（七ノ十[33]）デハ權衡ガ取レヌカラ、給料ハサゲナイカラ雇員[34]ニナッテクレト言フ。此時ハ平素我慢強キ余モ少々不快デアッタ。一層罷メヤウカトモ思ッタガ、然シ既ニ妻子モアリ、ソウ簡単ニ取扱フベキモノデナイトシテ辛抱シテイタルモ、悠々トシテ楽マズト言フ処デアッタ。トコロデ丁度其頃鉄道時報社（其頃ノ鉄道専門ノ最有力ナル雑誌社[35]）ヨリ懸賞論文募集ガ出タ[36]。題ハ「本邦鉄道ニ適用スベキ完全ナル列車連結装置」ト言ヒ一寸面白ヒ問題デアッタノデ[37]、余ハ心機ヲ一転スルタメ此論文ヲ作ッテミル気ニナッタ。ソレデ夫レカラ数日間ハ役所ノ仕事ハ可成部下ノモノニ任セテ、此論文作リニ熟中シテ書キ上ゲ応募シタノデアル。勿論当選スルトカシナイトカハ深ク考エナカッタガ、案外ニモソレガ一等ニ当選シタノデアル。之レハ之レ丈ニテ別ニ何デモナイヨウナコトダガ、余

---

iv　此見合セハ全ク失敗デアッタ。ト言フノハ双方トモイツシタカ知ラヌマニ見合ヒヲシテシマッタカラデアル。之レ全クソノ方法宜シカラザルタメデ栗野氏ガ、シバイヲ見ルトカ会食ヲスルトカスレバ長時間ヲ要スカラ、一方ハ勧工場（札幌狸小路ニアリシ）ノ入口ヨリ他方ハ出口ヨリ入リ行違ヒヲシテ見合ヒヲシヨウトノ申出ニ対シ余ハ写真デ知ッテオルカラ見合ヒニハ重キヲ置カズ不完全ナル方法ト思ヒツツモ同意(ク)シタノデアル。成程行違ッタノニハ相違ナイガソンナ時間ニ見ラレルモノデナク、且ツソノ時夕日ノ光線ノ反射ノ工合ヒデ全クワカラナカッタ。

(4)　明治三十八年七月廿九日　鐵道時報

B號懸賞論文當撰者

懸賞論文B號當撰者B、B、B生氏は石狩國上川郡旭川町宮下通四丁目鐵道作業局官舍鷲崎文三氏（帝國鐵道協會々員）なる旨七月二十一日附を以て仝氏より通知有之候に付弊局は直に左の賞狀に賞金を添へ仝氏に發送せり

弊局の募集に係る懸賞論文「本邦鐵道に適用すべき完全なる列車聯結裝置」に對し貴下の應募論文は審査委員會に於て優等と決定せられ候に付規程に基き賞金五拾圓也贈呈致候間尚益々御研鑽斯業の爲め貢獻せられむことを祈り候敬具

明治三十八年七月廿五日
鐵道時報局主幹
木下立安

鷲崎文三殿

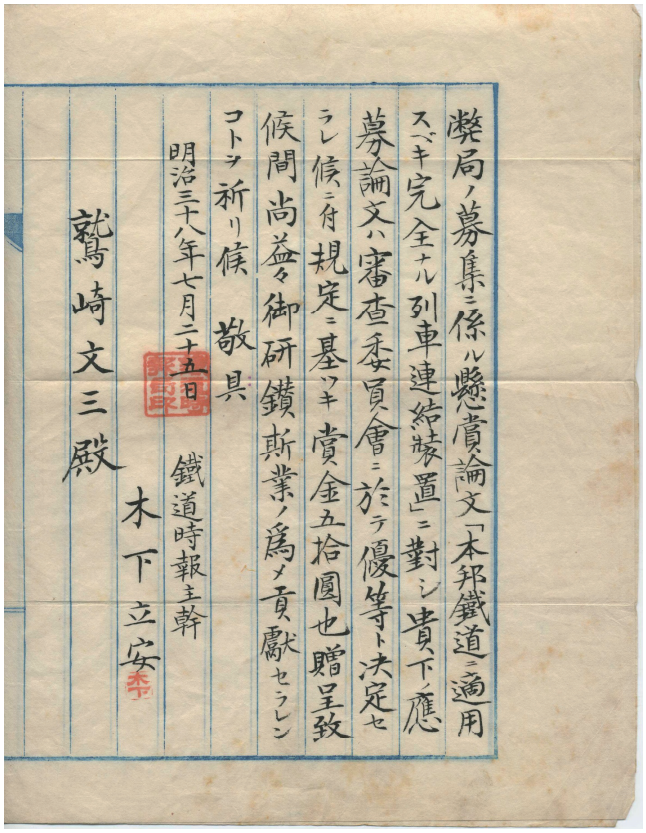
鉄道時報

普通列車と特別列車と

又岐阜驛のH氏は佐藤英二氏なる旨仝氏より通知ありたるに付弊局は鐵道時報一ケ年分無代進呈の手續きを了せり

図２　『鉄道時報』懸賞論文当選記事

出典　『鉄道時報』第306号（1905年7月29日），4頁



弊局ノ募集ニ係ル懸賞論文「本邦鐵道ニ適用スベキ完全ナル列車連結裝置」ニ對シ貴下ノ應募論文ハ審査委員會ニ於テ優等ト決定セラレ候ニ付規定ニ基ツキ賞金五拾圓也贈呈致候間尚益々御研鑽斯業ノ爲メ貢獻セラレンコトヲ祈リ候　敬具

明治三十八年七月二十五日　鐵道時報主幹　木下立安

鷲崎文三殿

図３　『鉄道時報』懸賞論文当選通知書

ニ於テハ之ガタメ其論文ノ審査委員ナル鉄道作業局ノ幹部連中並ビニ大学教授ナドニ知ラレテ、其後種々利便ヲ得タルコト多ク且ツ夫レガタメ計リデハナカロウガ、其後約二ヶ年後、技師（六ノ八[v 38]）ニ復活シ（夫レマデ二年間雇トシテ勤務シタ）矢張他ノ同期生ヨリ飛抜ケタノデアル。此時余ハ丁度年齢三二才ダカラ大学出ノ人ニモアマリマケテイナカッタノデアル。コレコソ真ニ禍ヲ転ジテ福トナスト言フ古ヒ諺ニ当嵌（アテハ）マルモノト思フノデアル。

此懸賞論文発表ノ際ニハ北海道鉄道部ノ幹部デハ部長初メ全ク予知セザルコトトテ、コンナ面動（ママ）クサキモノヲ書クヤウナモノハ内地ノ多数鉄道従事員中カラ出ルダロウトシテイタノニ、夫レガ手近カノ余デアッタカラ全ク意外デ、殊ニ田中氏ハ自分ノ部下ヨリ妙ナモノガ出タト喜バレタソウデアル。余ハ初メ応募ノ際居住地ハ明記シタルモ匿名ニテ号[vi]ヲ用イシタメ果シテ旭川ノ何人ナルヤ一周間（ママ）不明（次ノ雑誌発行日マデ）デアッタコトモ[39]、一寸イヂワルデ面白カッタソウデアル[40]。

サテ此時ノ一等賞トハドンナモノカト言フニ金五拾円ニ過ギザリシモ、其時代ニ於ケル新聞又ハ雑誌社ノ懸賞論文又ハ小説ノ一等ハ皆ナ五十円デ夫レヨリ約十年前デアッタト思フガ、明治ノ文豪高山林次郎[41]ノ応募セル読売新聞主宰の懸賞小説デノ一等当選（当選小説題名滝口入道）ノ時ナドモ、字数ハ余ノ論文ノ十倍以上ナリシモ十年前ノ事トテ矢張五十円デアッタ（尤モ此時ハ金時計ナリシガ高山モ此時ハ未ダ無名文士デ金時計ヨリモ金ガヨイト言フノデ、当時ノ安全時計ノ相場ナル金五十円ヲ受領シタ）。

余ノ場合ハ本賞以外ニ当時ニ於ケル多数ノ大私設鉄道会社ヨリ、夫々相当多大ナル副賞アル筈ナリシモ之レハ日露戦役直後ノ事トデ此際ニ副賞ナドトハ余リ呑気デハナイカト或ル会社ノ重役ガ言ヒ出セシタメ俄カニ取止メトナッタ。

釧路ニ転勤後間モナク明治三八年十二月男子出生ス。文雄ト命名ス。

釧路ニテ余ガ担当セル仕事ハ其量少ナキモ質ニ於テ可ナリ広ク全ク八百屋ニテ、運転方面ノ外旅客貨物ノ取扱ヒニモ関係スルヨウニナリ、車輌ノ大修繕ニモ関係シタ（旭川時代ニハ小修繕ニハ常ニ関係セシモ大修繕ハ専門ノ旭川工場ニテ取扱ッタ）。夫レデ之等ノ新ニ関係セル仕事ニ就テハ特ニ注意シテ、前ニ記シタル如ク仕事ヲ覚エル主義ニテ一貫シタルガ、相当ノ効果アッタト思フ。

明治三九年ノ秋ノコトト思フガ、其年十勝方面ニ生産セル雑穀ハ大豊作ニテ、夫レガ相場ノ関係上一時ニ十勝方面各駅ニ殺到シタル時ノ如キ、毎年ノ例ニ依レバ到底荷主ノ満足スル程度ニ輸送スルコトハ困難トノ評判セラレ且ツ当時ハ釧路管内ハ札幌旭川方面ト線路連結セズ、車輌ノ融通キカザルタメ余ハ釧路運輸ノ人及約一ヶ月間物ヲ総動員シテ之レヲ適切ニ組合セ善用シタル積リナリシガ、此輸送ハ意外ニ円滑ニ完了シ関係者ヨリ称讃（ママ）セラレタ事ナドガアッタ。

---

v　八級ニ採用サレタカラ雇ニナラズニ技師ヲ継続シタ場合ト全ク同ジコトニナリ少シモ後レナカッタ。

vi　号ハ「BBB」トシタルガ之レガ果シテ何人ナルヤ一周間不明ナノデ札幌出張所ノ高等官連中ノ問題トナリ遂ヒニ之レヲ余ノ名前「文三」ヲモジッタモノトシタソウデアル。然シテアル物知リノ技師ガ三ツ B ハ「ベスト々々」ヲ意味シ其頃ノ鉄材ノ最上等ノモノノ符号デアルノデ之レヲ用ヒタノハ面白ク且ツ号ニハ普通何々生ト二字ヲ用ユルニ特ニ三字ヲ用イシハ奇抜デアッタト言フテイタ。発表当時及論文掲載ノ雑誌ハ保存シテ置キシモ佐賀ニ移転ノ頃紛失シタヤウダ。当時ノ関係書類トシテ今ニ私有スルハ当選通知書ノミ。

六　札幌時代（明治四〇～大正三年）

明治四〇年秋札幌エ転勤ノ頃ハ丁度日露戦役後ノ混乱時代ニ当リ運輸数量俄ニ増加シタルタメ、輸送力之レニ伴ワズ且ツ冬期ニハ積雪多量ニシテ、不十分ナル輸送力ヲ益々減退セシメタノデ貨物ノ停滞甚ダシク、炭山各駅ノ積込線付近ハ貯炭ノ山ヲナシ他ニ置場ナキニ至リ、マタ炭坑用坑木ハ発送駅ニ堆積セラレタル儘新芽ヲ出スト言フ有様デアッタノデ、之等停滞貨物輸送ノ責ニ任スル余等北海道鉄道ノ運転関係者ハ相当苦心ヲシタモノデアッタ。同僚集レバコンナ苦シイ仕事ハ自分丈ハ今更仕方ガナイガ、小供ニハ決シテサシタクナイナドトコボシタモノデアッタ。尤モ之レハ保温装置ヲ有スル室内ニ執務スル広ヒ意味デノ同僚デナク、極寒中デモ夜間デモ屡々現場ニ出張ノ必要アル業務ニ従事スル我々ノ間デモ言フノデアッテ、之レガタメ北海道現業員ニハ賞与ヲ割増シ支給スルコトニナッテイルガ之レハ当然ノ事デアルガコノクライノコトデハ尚オ十分デハナイ気持デアッタ。右北海道貨物停滞ニ関スル世間ノ非難ハ如何ト言フニ、囂々（ゴウゴウ）トシテ当時ノ道内各新聞紙上ヲ賑ワシ遂ニ其源因（ママ）ヲ全ク鉄道従事員ノ怠慢ニヨルモノトスルニ至ッタノデ、野村局長[42]ハ之レヲ憂慮シ道内各地ノ商業会議所幹部及有力新聞記者約十数人ヲ招待ノ上、之レヲ約一周間道内全線ニ引張リ回シテ、鉄道課長及余ガ之レヲ補佐スルト言フ役目デ、殊ニ余ハ輸送力関係者トシテ自然ニ現察員ヨリノ種々ノ質問ニ答弁スル立場トナッタガ、意外ニ各現業員ノ了解ヲ得テ円満裡ニ此視察旅行ヲ終ッタ。此企ハ時機ニ適シタルモノデ其後ハ新聞記事ノ如キモ以前破解（ママ）的ナリシモノガ建設的トナリ、会議所ナドデモ全ク協調的トナリ我々鉄道員ノ執務上ニ甚ダ好都合トナッタ。加フルニ其後ノ天候即チ四一年早春ニハ積雪ハ相変ラズ多キモ吹雪意外ニ少ナクシテ、輸送力大ヒニ恢復セラレ三月上旬頃ニハ全ク順調トナッタ[43]。

コノ視察旅行ニ於テ鉄道ノ方デハ札幌ニ於テ一同視察員ヲ「茂世（モセ）[44]」ニ招待セシノミナリシモ宿泊セシ都市ニ於テ鉄道関係員諸共、視察員ヲ宴席ニ招待セシタメ我々モ毎夜宴会責メトナリお蔭ニ御馳走ヲ受ケシモ其代リニ連夜夜更シ[vii]スルコトトナリ閉口シタ。

右記ノ通リ四〇年度ニ於テ輸送力不足ノ結果車輛ヲ虐使シタルタメ、其翌年度ノ車輛修繕費ハ著シク増加スルノデ其予算ヲ本院ニ請求シタルニ、本院デハ北海道ニ限リ修繕費ヲ割増シスルコトハ出来ナイトシテ容易ニ承認セザルタメ、当時上京中ノ野村局長ヨリ渡辺工作課長ト運転課ノ技師二人中ノ一人ヲ、至急上京セシメヨトノ電命アリテ運転課ヨリハ余ガ行クコトトナリ、渡辺課長ト同行着京後直チニ野村局長ト打合セノ上本院ニ島工作局長[45]ヲ訪問シ、種々折得（ママ）シタルモ纏（マトマ）ラザルタメ更ニ其翌日島工作小林総務ノ両局長野村局長渡辺課長及余ノ五人ニテ協議シタルガ其席上余ガ携帯セル北海道各期吹雪ノ際ニ於ケル汽車運転状況ヲトリタル写真数葉ヲ、回覧ニ供シタルニ（実ハ此写真ハコンナ時ニ使用スル積リデハナク、余ガ内地ノ友人ニ贈呈スル積リニテ持来リシモノ）小林局長之レヲ見テ、島局長ニ「島君ナール程コンナ有様デハ内地ト北海道ト幾分差ヲツケルノハ已ムヲ得ンヨ」ト言ヒ出シタルタメ、其席ノ緊張セル空気モ大ニ寛和（ママ）セラレ遂ニ島局長モアル程度割増シスルコトニ譲歩シタ

---

vii　視察員接待ノ為ニハ庶務課員随行シ来リタルモ之レハ中里氏ノ指揮下ニアリシタメ、氏ハ頗ル多忙デアッタタメ余モ之レニお相伴シテ夜休ムノハ十二時過ギ朝ハ五時前ニ起キザレバ一番汽車ニハ間ニ合ワヌノデ実際困ッタ。加フルニ本視察団ハ普通ノ団体旅客同様ニ取扱ヒ難ヒコトモアリ時間ヲ空費シタヤウナコトガ度々起ッタ。

ルタメ小林局長ヨリ、本協議会ノ経過ヲ平井総裁[46]ニ申告シタルニ謹厳ナル平井総裁ノ口ヨリ出タル「ウン」ノ一声ニテ割増スルコトニ決定シタノデアル。コレニテ野村局長モ満足セラレタ。斯ノ如キ次第ニテコノ修繕費予算ノ決定後(ママ)レタルタメ、之レヲ含ム総鉄道予算ノ決定モ従テ違延(ママ)シ議会エノ提出期日切迫シ其方面ノ関係者ハ大ヒニ困ッタトノコトデアル。

明治四一年春養父母台湾ヲ引上ゲ余ノ官舎ニ約一ヶ月間滞在ノ上、札幌ノ北方約四〇哩ノ砂川ニ閑居シタノデ、此時ヨリ余ハ両親ノ生活費ノ幾分ヲ負担スルコトトナッタ。

同四一年秋男子出生ス。重雄ト命名ス。

大正二年デアッタカ精確(ママ)ナコトハ記憶シテナイガ鉄道ノ十年斗画(ママ)ト言フヨウナモノヲ作ルコトニナリ、余ハ之レガ主査トナリ作ッタガ之レニ就テハ余ハ相当努力シタ積リデアッタガ本院ニテモ、北鉄局ヨリ提出ノモノハ他局提出ノモノヨリ筋ガ通ッテヨク出来テイタト言ワレタヨウナコトナドガアッタ。

明治四二年秋大串ノ祖母八七才ノ高齢ニテ病死シタ。年ニハ不足ハナイガ余ニハ少年時代ヨリ特別可愛ガラレタノデ感慨無量デアッタ。同四三年秋実母モ五八才ニテ病死シタ。母ハ子供七人ヲ養育シタノデ之レガ為ニハ相当ノ苦労ヲナセンモノナレバ余ハ今少シ長命サセタイモノデアッテ哀悼ノ情ニ堪エナカッタ。

明治四五年春男子出生。良三ト命名ス。

七　釧路時代（大正三～五年）

釧路ニ転勤シタルハ大正三年五月ニシテ以前釧路在勤ノ時ニ比スレバ、所管区域ニ於テ大差アリ。即チ前回ノ時ハ、釧路帯広間八十哩ニ過ギザリシモ其後釧路線ハ札幌旭川方面ト連絡シ[47]網走線マタ著シク延長セラレタルタメ[48]全長二百哩以上トナリ余リ長過ギテ監督上不便ヲ免レズ。ソレガタメ野毛牛(ママ)運輸事務所ノ新設マデ野毛牛駅ニ駐在員ヲ置クコトニナッタ[49]。

大正四年一月男子出生ス。雄四郎ト命名ス。

釧路着任後一年間普通ノ事務ニ従事シ特記スル程ノコトモナカッタガ、大正四年晩秋余ハ感冒ニ罹リ、ソレガイツモノヤウニ簡単ニナオラズ遂ニ肺線(ママ)カタルニナッタ。ソレデ大事ヲ取リテ上京治療ヲナシタルガ約四ヶ月ニテ全快帰北シタ。之レヨリ先釧路ノ方ハ現場ダカラ余リ永ク欠勤ノ侭ニスル訳ニハユカナイノデ、余ノ長期欠勤届提出後間モナク後任者ヲ決定シ、余ノ家族ハ既ニ釧路ヲ引上ゲ本局所在地ナル札幌ニ居住中デアッタノデアル。其後札幌ニ居ルコト一ヶ月ノ後余ハ神戸鉄道局勤務トナリ一先ヅ単身赴任ノ上暫ク本局ニ勤務シタル後岡山ニ転勤トナッタ。斯ノ如ク北海道ヨリ内地ニ転勤ニナッタ事情ハ鈴木札幌局長ガ、例令余ノ病気ガ全快シタトハ言エ北海道ノ気候ガ余ノ病後ニ適セザルモノト見テ野村神戸局長ト相談ノ結果、取計ヒシモノニテ余ハ両局長ガ余ニ対シナシタル親切ナル処置ヲ深ク感謝スルモノデアル。

前ニ記シタルガ如ク余ガ九州ヨリ札幌ニ着任シタルハ明治三十一年三月ニテ夫レ以来満十八年十ヶ月間ヲ北海道ニ勤務シタコトニナルガ其間職務上ニハ相当難事ニ遭遇セシコトアリシモ私生活ニ於テ

ハ内地ニ比シ何等不便ハナカッタ。成程冬期ニハ寒気烈シカリシモ、同地ハ幸ヒ燃料豊富ニシテ簡単ニ保温装置ヲナセバ室内ノ如キハ相当ノ温度ヲ保チ得ルノデ却テ北海道ノ人ガ冬期内地ニ行キ風(ママ)ヲ引ヒタト言フヨウナコトハ、ヨク聞ク所デアッタ。然シテ言フ迄モナク夏期ハ全ク凌ギ安イノデ一ヶ年間ヲ通ジテ言ヘバ北海道ノ方ガ内地ヨリ住ミ安イト言フ人ガ、可ナリアッタ位デアル。余ノ養父母ノ如キモ閑居以来当時マデニ既ニ十ヶ年ヲ経過シ住ミ心地良ク近所ニ馴染モ出来テ相当愉快ニ生活スルニ至リ且ツ余ノ実弟ガ北海道庁ニ就職直後ナリシタメ今回ノ転勤ニ際シテモ内地ニ引越ヲ好マザリシタメ北海道ニ残ルコトトナッタ。

八　岡山・熊本時代（大正六～一二年）

大正六年一月岡山に着任、大正九年六月熊本ニ転勤、大正一二年休職ニ至ル間ハ専ラ本務ニ従事シ可ナリ多忙デハアッタガ、何等特別ナル事務ニ従事セザリシタメ特記スルコトハナイ。勿論列車ノ運行ヲ精確ニスルコト、旅客ノ取扱ヲ改善スルコト、貨物事故ヲ防止スルコト、列車運転事故ヲ防止スルコト、石炭其他消耗品ヲ節約スルコト等総テ与エラレタル任務ニ就テハ、相当ノ努力ヲナシタル積リデアル。殊ニ岡山時代ハ丁度第一次世界大戦後ノ混乱時期ニ当リ、鉄道運転方面ニモ其影響少ナカラズ従テ余ノ仕事モ可ナリ多忙デアッタ。然シ之レヲ北海道時代ニ比スレバ同地ノヨウニ作業上ニ困ッタト言フコトハナカッタ。ソレハソノ頃ノ北海道デハ現業員ヲ充実スルニ困ッタカラデアル。マタ此地方ハ北海道ト異ナリ積雪ノ被害ナク且ツ又タ北海道時代ヨリハ鉄道諸般ノ設備、車輌ノ改善等著シク進歩セシニ依ルモノト思ワル。

岡山時代多分大正八年デアッタト思フガ一不祥事件ガ起ッタ。夫レハ部下ノモトヨリ十数人ノ貨物抜取犯人ヲ出シタコトニシテ、此等ノ犯人ハ列車業務員ニシテ直接ノ指揮者ハ車掌監督デアルトハ言ヘ、余モマタ監督ノ責任ヲ免レナイデアッタ。

岡山時代ニ一回熊本時代ニ二回子供等ノ夏休ミニ際シ、避暑ニ行ッタコトガアル。何レモ八月イッパイデ、其間余ハ一人官舎ニ残リ家族全部ヲ避暑地ニヤリ自炊セシメ、余ハ日曜毎ニ行キ日帰リシタノデアルガ、小供等ハ大喜ビデ健康ニモヨカッタヨウデアル。岡山ノ町ハ大門[50]ト言フ瀬戸内海ノ海岸デ風光明媚ナル街デアッタ。殊ニココデハ宿泊所ノ位置ガ海岸ノ理想的ノ所デ、ドンナ暑ヒ時デモ涼風爽カデアッタ。熊本デノ一回ハ有明海ノ沿岸三角[51]ト言フ所デアッタガ、ココモ景色ハヨカッタガ宿泊所ノ位置ガヨロシカラズ。最暑ヒ夕日ガ室ノ隅マデ差込ミ風モ少シモ通ラナイヨウナ所デ困ッタ。モ一回ハ栃木(トチノキ)ト言フ阿蘇外輪山ノ麓ニアル温泉場デ[52]、ココノ湯ニハ温度低クテ夏向キノモノガアリ殊ニ湯量豊富デ付近ノ小滝ノ水モ暖カク全ク湯ノ滝デアッタ。三回トモ其付近デ新鮮ナル魚類野菜等ヲ買入レルコトガ出来テ便利デアッタ。避暑カラ帰ッテカラ四、五日間小供ノ大食ニハ一寸驚ヒタガ、其冬ニハ風邪モヒカナカッタヨウニ記憶スル。子供ヲ避暑ニヤルト言フト贅沢ニ聞エルガ実ハ夏休ミニ自炊ヲシテ訓練ノタメ山ヤ海ニヤルノダカラ、家庭ノ事情許セバヤッテモ相当ノ効果アルモノト思フ。

熊本在勤中大正一二年三月、余ハ愈々永年勤続ノ鉄道界ヲ去ルコトニナッタ。夫レハ前ニ記シタル

コトアルガ如ク余ハ元来蒲柳ノ質ナリシノミナラズ、大正五年ニハ慢性病ニ罹リシコトモアッテ、永ク激務ニ従事スル事ハ無理ト思ワレタカラデアル。夫レデ友人中ニハ東京郊外ニアルアル私設鉄道ノ閑散ナル業務ヲ引受ケテハドウカト勧メテクレタモノモアッタガ、余モソノ時マデハ未ダ悠々自適スル気ニハ容易ニナレナカッタガ、其頃余ニハ既ニ女学校卒業済ノ女子一人、中学四年ノ長男、同二年ノ次男、小学四年ノ三男、小学一年ノ四男ガアッタ。ソシテ其頃マデ皆ナ無事ニ生長シ、アマリ病気モセズニ学校ノ方モ中以上ノ成績ニテヤッテキタガ、尚ホ五、六年間少ナクモ末子ガ中学一、二年ニナル頃マデハ家庭教育平ッタク言エバ躾ヲスルニハ、最注意ヲ要スル時機デアッタノデ此点ニ最重キヲ置キ、種々考慮ノ結果其後数年間ハ東京郊外ヨリモ余ノ郷里ナル佐賀ニ居住スルコトヲ最好都合デアルトシテ遂ニ之レニ決定シタノデアッタ。勿論佐賀ニハ余ニ適良ナ仕事ガアル訳デハナイガ、余ニハ既ニ恩給モツキ、最前ニ記シタル様ナ倹素ナル生活ヲ多年間続ケタル結果、若干ノ貯金モ出来テドウヤラ其後ノ生活費及小供ノ教育費ニ窮スルヤウナコトハ先ヅナイモノト思ッタノデ差当リ仕事ノ如何ヨリモ全ク小供ノ教育ニ重キヲ置キ決定シタニ外ナラナイノデアル。然ラバ何故ニ佐賀ヲ撰ンダカト言フニ抑（ソモ）モ佐賀ト言フ所ハ古来明器偉材其人ニ乏シカラズ。殊ニ明治維新ニ際シテハ幾多人材輩出シテ、尊王愛国ノ大義ヲ宣揚スルト共ニ、マタ他ニ卒（ママ）先シテ泰西ノ文明ヲ輸入シテ日本文化ノ先駆ヲナスナド、他ニ誇ルベキモノガ少ナクナイノデ、之等旧藩時代ヨリノ雰囲気ニテ現今ニ於テモ教育地ナドト称セラレル位ヒデ、且ツ周囲ノ沃野ニハ野産物豊富ナルト共ニ有明海及玄界灘ヨリ、海産物マタ乏シカラズ。且ツ小都市トシテノ諸般ノ設備一通リ具備セルタメ、旧佐賀藩出身者ナル我々ガ子供ノ教育旁々（カタガタ）閑居スルニハ最適地ト思ワザルヲ得ナカッタ。シカシ東京郊外ニ然カモ身体ニ処シタル閑散ナル仕事ガアルノニ之レヲ思ヒ切リ田舎ニ燻（クスブ）ルノダカラ心残リガ全クナカッタノデモナイノデアッタ。

過記シタルガ如ク余ハ退官後ハ小供ノタメ居住地ヲ撰定スルト言フ程ニ家庭教育ト言フコトニ就テ相当関心ヲ以テイタガ、之レハ実際上ハ父親ヨリモ母親ノ仕事ナレバ妻ハ特ニコノ事ヲ重視シ、小供ノ躾ケニ遺漏ナキヲ期シタルタメ前期ノ様ニ小供等ハ皆ナ揃ッテ無事ニ育チシノミナラズ、自負スルヤウダガ余ノ小供等ハ兄弟喧嘩ヲシナカッタ。随分世間デハ小供ヲ可愛ガリ過ギテアマエサセルタメ小供等ハ遂ニ自然ト我儘ニナッテ兄弟喧嘩[viii]ヲシタリ。女兄弟マデガ口先キバカリデナク手ヲ出シテ叩合ヒヲナスモノモアリ。其我儘ハ益々増長シテ遂ニハダラシナイ人間ヲ造ルコトニ至ラシメルモノデアルガ、之レハ親ガダラシナクッテ相当ノ躾ヲナサズシテ、タダ可愛リ過ギルタメデアッテ、之レハオモチャトシテノ可愛ガリ方デ、決シテ小供ノ将来ヲ思ヒ遣ッテノ真ノ可愛リ方デハナイノデアル。妻ハ未ダ里ニ居ル時カラ親ヨリ躾ノ大事ナルコトヲ十分受ケツイデオルヤウデアル。元来里ノ父ト言フノハ余ノ実父型ノ人格者デ母ハ大串ノ祖母、松尾ノオ春サン式ノ賢夫人デアッタヤウデ、女子六人男子一人ノ子供ヲ養育スルニ実ニ行届ヒタモノデアッタソウデアル。此事ニ就テハ人格者デ厳正ナル批評家タル栗野氏ガ感心シテ屢々話サレタ事デアッテ、実ハ之レガ余ノ結婚成立ノ一大要素デモアッタノデアル。斯ノ如ク妻ガ子供ノ躾ヲシテクレルノデ、余ハ家庭ノコトハ殆ンド妻ニ任セ、専心職務

viii　兄弟喧嘩ハ各自ノ我儘ヨリ起ル場合多シ。

ニ熱中スルコトガ出来テ此点余ハ仕合セデアッタ。

九　佐賀時代

佐賀ニ閑居スルコトニ決定後直チニ佐賀駅長ニ依頼シ、借家ヲ探シタガ見付カラズ、已ムヲ得ズ一時凌ギノ家ニ入リ約一周間後、閑静ニシテ且ツ便利ナル市内ノ屋敷町川原小路ニ手頃ノ家ヲ見出シテ引越シ、長男次男ハ余ノ昔ノ母校ナル佐中ニ、三男四男ハ旧藩時代ノ弘道館[53]（日本三弘道館ノ一に数エラレタ）ノ遺跡ニ当ル勧興小学校[54]ニ入学セシメタ。

前期ノ通リ、佐賀ハ郷里ニテ祖先ノ墳墓モアルノミナラズ、十八才マデノ居住地ナリシ関係上、其頃マデ若干ノ近親及ビ少年時代ノ友人モ居住シテオルノデ、自然之等トノ間ニ旧交ヲ温メルコトトナリ、且ツ妻モ彼ノ趣味ナル茶ノ友達ガ殖エテキテ、田舎ニ燻ブルト言フ感ジモ、何時ノ間ニカ解消シ、相当面白ク愉快ニ生活スルニ至ッタノデ、例令最初ニ佐賀ニ居住スルヲ好都合トスル期間ヲ先ヅ五、六年位ヒデ其後ニナレバ他ニ移転シタトコロガ、小供ノタメニモ差支ヘナイト思ッタトハ言ヘ、何カ転居ノ必要起ラザル限リ仕事ガナケレバ百姓ヲシテモ、佐賀ニ永住ノ決心ヲナシ借家住ヒヲヤメテ売家ヲ買入レルカ、マタハ新築シタ方ガ、経済上ニモヨクハアルマイカト考エサセラルヽノデ、コウナルト可成早ク落着場所ヲドチラニスルカ予定シ置ク方ガ宜シイト思ッタガ、佐賀住ヒ後未ダ三年モ経過セザル中ニ之レヲ予定シ置クコトニナッタノデアル。ソレハ三男ガ佐中入学頃マデハ何等変ッタ事ハナカッタガ、ソノ後段々勉強嫌ヒニナリ学科ノ成績宜シカラズ。其代リニ音楽ニ趣味ヲ持ツヤウニナリ、ソレガドウモ彼ノ箇性（ママ）ト思ワルルニ至ッタノデアル。ソレデ此調子デハ寧ロ音楽ヲ学バセテ将来芸術家トシテ立タセル方ガ宜シイト言フコトニナッタ。然シテ音楽ヲ学ブニハ東京ニ行ク外ハナイガ、東京ニ下宿シテハ外ノ学科ト異ナリ勉強ニ不便デアルノデ熟考ノ結果遂ヒニ、三男佐中卒業後直チニ全家挙ッテ東京郊外ニ移転スルコトニ決定シ、佐賀ニ居ル間ハ其積リデ根ヲ張ラザルヨウニ注意シ、運送ニ不便ナル道具類等モ可成買入レヲヒカエタガ、順調ニ行ケバ移転ノ時期ハ昭和五年三月トナリ、長男ハ大学卒業、次男ハ大学エ入学直後ニテ転校ノ必要アルハ四男ノミトナリ此点ヨリ言フモ甚ダ好都合トナッタノデアル。

昭和元年秋田中冨士太氏病死ス（五九才）。氏ハ松尾家ノ三男、幼ニシテ父ヲ失ヒシモ賢母（お春サン）ノ教養ヲ受ケ生長シタル人ニテ、余ハ蔵前時代初対面ノ時ヨリ同氏ノ言行ニハ大ヒニ感心シテイタ。北海道ニ行キシモ氏ノ勧メデアッタカラデアルガ、其時カラ明治三八年氏ガ本省ニ転勤セラルルマデ八ヶ年間、余ハ直接同氏指導ノモトニ勤務シタノデアルガ、氏ハ官吏トシテモ常ニ誠実無比デアッタノデ、部下ノ一部デハ窮屈ガラレタコトモアッタガ、余等ニハ張合ヒノアル頼母（タノモ）シキ上役デアッタ。氏ハ大正八年頃鉄道研究所長ヲ最後トシテ退官セラレタルガ[55]、其後再ビ鉄道省ノ嘱託トナリ、第一次世界大戦ノ講和会議関係ノ鹵獲（ロカク）車輌処分委員会ノ委員長トナラレタコトガアッタ（当時他ノ各種委員会ノ委員長ハ皆ナ欧米人ナリシニコノ委員長ノミガ東洋人デアッタ由）。氏ハ注意周到ノ人ナリシカバ何ヲ為シテモ間違ヒナドハナカッタノデ、氏ガ一旦引受テタコトハ絶対信頼シテ差支ヘナキモノデアッタガ、如何ナル行違ヒカ最後ニ取返シノ出来ナイ、トンデモナイコトガ出来テ甚ダ遺憾デ

アッタ。夫レハ氏ガ腹膜炎ニ罹ラレタルヲ、単ニ腹痛ト思ヒ込ミ、売薬ナドヲ用イテ間ニ合セ、初期診察ヲ受ケザリシ結果、遂ヒニ回復時期ヲ逸シテシマワレタコトデアル。之レガタメ氏ハ元来強健ナル体質デアリシニモ拘ラズ余命ヲ全フセラレナカッタ。コンナコトハ平素ソソッカシイ人ニハアルコトダガ、氏ニハ全ク意外ノコトデアッタ（我々モ大ニ注意スベキデアル）。

以上デ佐賀ニ居住シ将来ハ東京ニ移転スルコトヲ決定シタルマデノコトヲ、色々ト思ヒツイタル儘書キナラベテ尚ホ之ヨリ佐賀時代ノ其後ノコトヨリ東京移転ト引続キ現在マデ書キ続ケタク思フガ、近頃余ハ静座（ママ）シテイテモ疲労ヲ感ジ時々寝ルト言フ有様ナノデ、遺憾ナガラ之レハ他日ニ譲リ、ココラデ一先ヅ擱筆（カクヒツ）シタイト思フノデ、最後ニ少シク余ガ以上ノ公私生活上及ビ現在ニ至ルマデニ於テ経験シタル処世上ノ注意事項ノヤウナモノ二、三ヲ挙ゲテ（前ニ記シタルコトト復重スル嫌ヒアルモ）終リトスル。

十　注　意　事　項

一　倹素質実ナルコト

即チ言葉ヲ換エテ言エバ無駄シナイコト物事ヲ粗末ニセヌコト、ダラシナイコト等デ、之レニ適功ナル一、二ノ実例ヲ書イテミレバ、余ノ部下ニ昔（明治三一年頃）日給三五銭ニテ採用サレタル機関車掃除夫ガアッタ。此人ハ別ニ凡人ト異ナル所ハナカッタガ、職務ニ精励ナノデ人並以上ニ昇級シ永年勤続ノ結果遂ヒニ機関庫主任トナリ、鉄道ヲ罷メル時ニハ技師ニマデナッタ人デアルガ、夫人ト協力倹素質実ノ生活ヲナシタルタメ、薄給ニモ拘ラズ多数ノ子供ヲ完全ニ教育シ、長男ハ某鉄道局某管理部長、次男ハ某鉄道局運輸部長（コノ人ハ既ニ洋行モ遊シ遠カラズ二級技官ニ昇進ノ見込）ニナッテイル。マタ昔余ガ上役デアッタ某鉄道局某部長（当時技師三ノ一）ハ其頃収入ノ多キニ任セテ、ダラシナクアレバアルッダケノ生活ヲシテイタガ、ソレカラ十数年後ノアル日余ノ知人ガ同氏ヲ訪問シタルニ玄関ノ付近ニ雑草繁リ下駄ガ飛石ノヤウニ乱雑ニ置カレテアッタノデ、ソノダラシナキニ驚キ、遂ニハイルキニナラズ家人ノ気付カザルヲ幸ヒ其儘帰宅ノ途中、余ヲ訪フテ同氏ハ近頃ドウカセラレタカト言フカラ、余ハ別ニ何モ知ラナイト言ッタコトガアルガ、此人ハダラシナイノガモトデ家庭ニ於テ甚シク無駄ガアッタノミナラズ、役所ニ於テモ重要書類ト反古トゴッチャニシテ紛失シタコトナドモアッテ、コウ言フ具合ダカラソノ子供等ハ家庭ニ於テ父母ヨリダラシナクスルコトノ実知教育ヲ受ケル状態デアッタノデアル。ソレデモ可笑（オカシ）ナコトニハコンナ親デモ、自分等ノダラシナイノハ棚ニ上ゲテ、小供等ニハ倹素質実ヲ教エテイタヨウデアルガ、小供等ハ親ノ言葉ヨリモ、其行動ニ感染シテ益々ダラシナイヨウニナル計リデアッタ。ソレデコノ人ハ老後金ハナシ。サリトテ、小供等ハ親ヲ扶養スルニダラシナクスレベ収入ガ多クテモ老後ニ窮迫シ、之レト反対ニ収入少ナキモ倹素ナル生活ヲナスモノハ老後ニ仕合セヲナスモノデアル。モ一ツ個人ノ例デハナイガ旧藩時代ニ於テ鍋島閑叟公ガ襲封後、御国帰リノ初下リ行列ガ品川ニ止マリ夫レヨリ以西ニ進マザリシヲ不思議ガリ、探究セラレタル結果、ソノ遠因ガ、全ク積年窮乏ノタメナルコトヲ悟ラルルヤ、当時未ダ若年ノ公ハ藩政ノ枢機ニ参与セル重臣等ト計リ、大英断ヲ以テ倹素質実[ix]ノ異風ヲ奨励シテ、財政ノ基礎ヲ確立セラレシ

有名ナ昔話ガアルガ（コノ財政ノ基礎確立シタレバコソ、鍋島藩ハ他藩ニ率先シテ泰西ノ文明ヲ輸込(ママ)シ、兵事教育医術等ノ改善発達ヲ計ルコトガ出来タノデアル)、之レナドモ、代償ノ差コソアレフサワシキ実例デアル。余ハ前記ノ如ク親ノ感化ヲ受ケ少年時代ヨリ之レヲ実行シ来リタル積リニテ、余ノ家デハ必要品ヲ買入レテモ決シテ粗末ニ扱ハナイカラ、若シソレガ備品ナラバ其保存年限ヲ長クシ消耗品ナラバ夫レヲ最有効ニ消費スルカラ、台所其他物置等モ家ニ整然タルモノデアッタ。ソレガタメ何ヲナスニモ手数ハ掛ラズ迅速ニ処理出来ルト言フ有様デ、且ツ常ニ物事ヲ清潔ニスルカラ、小供等ノ保健上ニモ大ヒニ効果アリシモノト思フ。

斯ノ如ク倹素生活ヲナシタレバ余ハ親ノ遺産ドコロカ年三三才ノ時ヨリ養父母ノ生活費ノ幾分ヲ引受テ且ツ本書中未ダ記載セザリシガ、実弟（五郎）ノ札幌農大付属土木専門学部入学以来ノ学費ヨリ早世シタルタメ、其妻子ノ生活ヲモ、相当長年月ニワタリ世話シタルニモ係ワラズ、臨時収入ノナキ月給取リデアリナガラ、多数ノ子供等ヲ無事ニ育上ゲ、教育ナドモ最高ノ程度マデナシ得タノデアッテ、此点大イニ満足スルトコロデアル。若シ仮リニダラシナクヤッタトシタラ子供等ノ教育ドコロカ自己ノ生活ニモ、不自由デハナカッタカト思フ。ダラシナクスル人ガイソガシイカラソコマデハ手ガマワラヌトハ、前ニモ言ッタヨウニヨク聞クコトダガ、之ハダラシナクスルカラ何ヲナスニモスラスラト円滑ニ運バズイソガシイノデアル。

二　禍ヲ転ジテ福トナスコト

前ニ詳細記載セシ通リニシテ余ノ懸賞論文当選ノ如キハ全ク之レニ当嵌マルモノデ、之レハ誰レデモ心掛クベキコトデ、禍ヲ禍トシテ已ムヲ得ナイナドト、軽ク言フ人ガアルガ、此等ノ人ノ考ハ其範囲ガ狭イカラ気付カナイデハナイカト思フ。

三　全力ヲ集中スルコト

之レハ余ガ公務マタハ私事ニ於テ度々難事ニ遭遇セシ場合、全力ヲ集中シテ之レニ当リ、好結果ヲ得タルタメ言フノデアッテ、当然ノ事ナガラ特ニ記シタノデアル。

四　部下ヲ信用スルニ注意ヲ要スルコト

余ハ旭川時代ニ一回、岡山時代ニ一回、部下ノ優秀ナル手腕アルモノヲ、信用シ過ギテ失敗シタコトガアル。何レモ投書ニ依テ不正ノ事実ガ発見セラレヨワッタガ注意スベキコトデアル。コンナコトガドウシテ起ルカト言フニ、ソレハソノ人ガ上役ノ信用ヲ傘(ママ)ニ着テ私欲ヲ遂ゲントシテ起ルモノデアルカラ、上役タルモノハ此点ニ重キヲ置キ、少々ノ失敗ハ其手腕ニ免ンジテ見ノガスト言フコトガ甚ダ禁物デアル。マタ手腕家ダカラトテ妙ニ特別待遇ヲナスヨウナコトモヨロシクナイ。

---

ix　要スルニ生活ヲ倹素質実ニスルコトハ貴賤貧富ヲ問ワズ誰レニモ必要ト言フヨリモ寧ロ当然ノコトニシテ余裕ガ出来タカラトテダラシナクスルガ如キハ道徳上ノ罪人ト言ワザルベカラズ。

五　酒・煙草ニ就テ

余ハ壮年時代ヨリ酒ハ好キデアッタ。然シ其飲ム分量ハ小量ニテ、晩酌半合位ヒデ十分デ老年ノ今日ニ至ルモ其量ヲ増サナイノデ、全ク禁酒スルノ必要ハナカッタ。昔安田財閥ヲ築上ゲタル初代安田善次郎氏ハ、晩酌ノ分量ガ段々進ムノニ困ッテ一ヶ月毎ニ一周間ヅツ禁酒シタト言フガ、余ニハソンナ必要ハナカッタ。煙草ハ四十才位ヒマデハ人並以上ニ吸フタガ健康ニヨクナイノデ其後断然禁煙シタ。此等酒煙草ノ節制ハ体質及収入ニ応ジ勇気ヲ出シテ相当ノ程度ニ断行スベキモノト思フ。

六　無理ヲナサザルコト

即チ体ヲ過労セシメザルコト、過飲過食ヲナサザルコト、夜更シヲナサザルコト等其他凡テ無理ヲナサザルコトヲ言フノデ、之レハ誰レデモ心得テオリナガラ、ツイウッカリスルモノデ、余ノ友人間ニモ其例乏シカラズ。余ノ長兄次弟ナドモ飲酒ガ過ギテ余命ヲ全フシナカッタ。余ハ之レニ就テハ時ニ警戒シテオル積リデアル。即チ前ニ記シタル禁煙ノ如キ、晩酌ノ量ヲ節スルガ如キ（オ蔭デ安田式ノ苦シキ節酒法ノ必要ナシ)、マタ二回目ノ釧路時代囲碁ニ耽（フケ）リ毎夜夜更シシテ其害ヲ知ルヤ、其後ハ夜間ニハ全ク囲碁ヲ禁ジタルガ如キ其他病気ノ時ナドモ決シテ無理ヲシナカッタ。強ヒテ言エバ公務多忙ノタメ時々已ムヲ得ズ無理ヲシテ妻ニヤリコメラレル位ヒデ、斯クノ如ク無理ヲセズ体ヲ大事ニシタレバコソ、余ハ兄弟中デモ最年長者トナリ、吉川ノ婿五人ノ内、体ノ弱ソウデ最心配サセラレタ余ガ最長命スルコトニナッタノデアル。

七　家庭教育ニ就テ

之レニ就テハ断片的トハ言ヘ、前ニ度々記載セルヲ以テココニハ省略ス。

八　上役ニ対スル態度ニ就テ

余ハ在官中上役ヨリ常ニ相当ノ信用ヲ受ケテイタヨウダ。従テ進級ノ時ナドモ他ニ後レタコトハナカッタ。比較的早々退官シタルハ全ク健康ガ許サナカッタタメデ、之レハ已ムヲ得ナカッタノデアル。トコロガ余ノ養父ハ高知県エノ転勤ノ時ナド佐賀ヨリ干渉警部ガ来タトテ頗ル不評判ナリシモ着任後間モナク所管内隣村間ニ起リシ水田用水引入レニ関スル大水喧嘩ヲ仲裁シテ其手腕ヲ認メラレ忽（タチマ）チ不評判ヲ解消シタルノミナラズ、其勤務成績ハ常ニ優秀ナリシニモ拘ラズ、其割合ニ昇進セザリシハ全ク上役ニ対スル態度ガ剛慢（ママ）不遜ナルガ如ク、意見ノ異ナル将ノ如キ至誠以テ貫クト言フ風デナク妙ニ上役ニツッカカルガ如キ態度アリシタメニシテ、父ハ退官後コノ事ヲ後悔シテ余ニ屡々訓戒ヲ与エタコトガアッタカラ、コレハ余ノ経験ニハアラザルモ特ニココニ記載シタノデアルガ、之レニ反シ上役ニ諂（ヘツラ）フ態度モ勿論宜シクナイ。注意スベキコトデアル。

以上記シタル注意事項ハ新味アルニハアラズ。余ノ現在ニ於ケル感想ニ過ギザルガ如キモ、其大部分ハ余ガ実際ニ於テ経験シタルモノニシテ、且ツ之等ハ決シテ時勢ノ変遷ニ依ッテ差違ヲ生ズルモノニアラザレバ、後世余ノ子孫タルモノハ特ニ此等ノ事項ニ就テ、善意ヲ以テ一段ノ注意アランコトヲ希望スルモノデアル。　終

略　　歴

位　勲	正五位勲五等	生年月	明治九年一月生
戸　主	本　　人	氏　名	鷲崎　文三
		旧氏名	大串　文三

出生地　佐賀県佐賀郡兵庫村字藤木
原籍及族籍　東京都北多摩郡武蔵野町西窪　士族
現住所　山口県山口市法泉寺西滝

年号　月[56]	任 免 賞 罰 其 他 事 項	年齢	官庁会社其他
明　治			
26年７月	佐賀県立佐賀中学校卒業	18	
29年７月	東京工業学校機械科卒業	21	
10月	技士ヲ命ズ月俸二五円		筑豊鉄道会社
30年12月	月俸金三十円給与	22	同上
31年３月	依頼技手ヲ免ズ	23	九州鉄道会社
同月	事業手ヲ命ズ月俸金四五円給与		北海道庁
７月	旭川機関庫主任事務取扱ヲ命ズ		同上
11月	旭川機関事務所長事務取扱ヲ命ズ		北海道庁鉄道部
32年７月	月俸五十円給与	24	同上
33年７月	月俸五五円給与	25	同上
34年12月[57]	月俸六十円給与	26	同上
36年３月	依頼事業手ヲ免ズ	28	同上
４月	任北海道鉄道技師叙高等官八等		内閣
同月	十一級俸下賜		内務省
同月	旭川機関事務所長ヲ命ズ		北海道鉄道部
６月	叙正八位		宮内省
37年４月[58]	陞叙高等官七等	29	内閣
６月	叙従七位		宮内省
38年３月	陞叙高等官六等	30	内閣
同月	十級俸下賜		同上
同月	勅令第百六号ニ依リ廃官		
４月	雇ヲ命ズ月俸金七十円ヲ給ス		鉄道作業局
７月	懸賞論文ニ応募シ優等ト決定セラレ賞金五〇円給与セラル		鉄道時報社
９月	札幌鉄道作業局出張所釧路機関事務所長ヲ命ズ		鉄道作業局
39年４月	三七、三八年事件ノ功ニ依リ金七十円ヲ賜フ	31	賞勲局
７月	月俸金八十円ヲ給ス		鉄道作業局
10月	札幌鉄道作業局出張所釧路運輸事務所長ヲ命ズ		同上

40年７月	北海道帝国鉄道管理局運輸課勤務ヲ命ズ	32	北海道帝国鉄道管理局
９月	任帝国鉄道庁技師叙高等官六等[59]		内閣
同月	八級俸下賜		逓信省
同月	叙正七位		宮内省
41年12月	任鉄道院技師叙高等官六等	33	内閣
同月	八級俸下賜		鉄道院
同月	北海道鉄道管理局勤務ヲ命ズ		同上
42年12月	七級俸下賜	34	同上
44年７月[60]	六級俸下賜[61]	36	同上
大　正			
元年12月	陞叙高等官五等	37	内閣
同月	叙従六位		宮内省
２年12月	五級俸下賜[62]	38	鉄道院
３年５月	釧路運輸事務所長ヲ命ズ[63]	39	同上
５年１月	釧路運輸事務所長ヲ免ズ	41	同上
４月	西部鉄道管理局勤務ヲ命ズ[64]		同上
12月	岡山運輸事務所勤務ヲ命ズ		同上
６年１月	叙勲六等授瑞宝章	42	賞勲局
12月	陞叙高等官四等四級俸下賜		内閣
７年２月	叙正六位	43	宮内省
10月	岡山運輸事務所長ヲ命ズ		鉄道院
８年７月	三級俸下賜	44	鉄道省
９年６月	熊本運輸事務所長ヲ命ズ[65]	45	同上
11月	大正五年乃至九年事件ノ功ニ依リ章出ル旭日章及金七百円ヲ賜フ		賞勲局
12月	二級俸下賜		鉄道省
11年１月	叙勲五等授瑞宝章	47	賞勲局
７月	陞叙高等官三等		内閣
同月	叙従五位		宮内省
10月	満二五年以上勤務効績（ママ）章授与表彰		鉄道省
12年３月	一級俸下賜	48	内閣
同月	文官分限令第十一条第四項ニ依リ休職ヲ命ズ		同上
13年10月	依願免本官	49	同上
14年１月	叙正五位	50	宮内省

1）現在の佐賀市兵庫町大字藤木。

2）以下、特別な断りのない限り、『回顧録』は初版を指示する。

3）中村尚史「帝国鉄道協会の成立 ── 日本鉄道業の発展と業界団体 ──」九州大学経済学会『経済学研究』第70巻第４・５合併号（2004年４月)、98頁。

4）中村尚史『日本鉄道業の形成 ── 1869～1894年 ──』日本経済評論社、1998年、13頁。

5）佐賀藩における武士の身分は独特で、藩主の下に、鍋島の三家・親類・親類同格、連判家老、着座、独礼、平侍、手明槍、徒士、足軽という序列を有していた。このうち手明槍は、初代藩主・鍋島勝茂が財政難の中で家臣の多いのを憂慮し、1620（元和６）年、知行50石以下の侍に対して平時の諸役を免除するかわりに、その知行を没収し、切米15石ずつを一律に支給したことに始まる。その名称は戦時に槍１本を持って馳せ参じた点に由来するが、まもなく手明槍も平時の役方として勤務するようになった。幕末佐賀藩の行政機構を参照すると、手明槍は、書上方、御記録方、物書、郡目付といった役に就いている。佐賀市史編さん委員会編『佐賀市史』第２巻（近世編)、1977年、24、32-44、347頁。

6）1880（明治13）年の改正教育令で、学区制にかわる学部（現在の小学校の校区の原初的形態）が作られた。藤木村は淵村とともに淵部の淵藤小学校という学部に属していた。文三が学部に従っていたのであれば、淵藤小学校に通学していたことになる。同小学校は、明治33年に順正小学校と合併して兵庫尋常高等小学校となり、1941（昭和16）年に兵庫国民学校、1947（昭和22）年に兵庫小学校と改称、今日に至る。佐賀市史編さん委員会編『佐賀市史』第3巻（近代編明治期)、1978年、160-167、762-763頁。

7）1876（明治９）年2月、佐賀県令が文部省に上申して設立された第一番変則中学校を母体とする。1878（明治11）年長崎県（当時）佐賀中学校が北堀端の一角に設置され、変則中学校の全生徒を収容した。1883（明治16）年５月、佐賀県再置により佐賀県佐賀中学校と改称、校舎を旧城内本丸藩庁跡に移転した。1886（明治19）年、学校令公布に伴い佐賀県尋常中学校と改称、修業年限を５年とした。1901（明治34）年、佐賀県立佐賀中学校と改称。1949（昭和24）年、旧佐賀中学、旧佐賀高等女学校、旧佐賀成美高等女学校を統合し、佐賀高等学校となるが、1963（昭和38）年佐賀西高等学校として分離し、佐賀中学校からの伝統を継承した。佐賀市史編さん委員会編『佐賀市史』第３巻、774-784頁；創立百三十周年記念誌編集委員会『栄城　創立百三十周年記念誌』佐賀県立佐賀西高等学校、2006年、75-91頁。

8）1845（弘化２）年、小城藩士横尾只七の次男として藩内の牛津町に出生、1857（安政４）年に同藩足軽松田勇七の養子となる。藩校及び昌平校に学ぶ傍ら、西周に就いて学んだ。西が陸軍卿山縣有朋に推薦したことによって陸軍省に出仕、1872（明治５）年フランス留学を命ぜられて法学・政治学を修めた。帰国後、官を辞して自由民権運動に携わる。1879（明治12）年長崎県会議長、1889（明治22）年鹿児島の造士館教頭、衆議院議員を経て、1898（明治31）年に第１次大隈重信内閣の大蔵大臣となる。その後も、文部大臣、衆議院議長、司法大臣を歴任し、男爵を授けられた。1914（大正３）年、70歳で死去。今藤慶四郎・樋渡清廉編『島津珍彦男建像記念誌』建像委員会、1923

年、55頁；小城郡教育会編『小城郡誌』木下泰山堂、1934年、463-464頁；「松田正久年譜」、笹川多門『松田正久稿』江村会、1938年、所収、1-7頁。

9）1892（明治25）年の小城における第２回衆議院議員選挙事件に関しては、小城町史編集委員会編『小城町史』、1974年、410-411頁に詳しい。また養父・鷲崎頼之による松田正之への大干渉ぶりは尋常を逸しており、松田の腹心だった小城元町長・中島健が「松田氏を憎むこと甚しく、当時の小城警察署長鷲崎警部は、上官の命を誤認したるか、過信したるか、将(はたま)た事実か、松田を殺せと巡査にも命令し、捜索追跡、全区に厳しく、殊に小城地方峻烈にして、従って松田氏本人も、非常の警戒をなし、辛うじて上京せられたる位なりし」と回想したほどである。笹川『松田正久稿』、124-125頁。

10）東京工業学校、のち東京高等工業学校（現在の東京工業大学）。当時は蔵前に所在していたが、1923（大正12）年９月の関東大震災で大きな被害を受け、翌年４月、荏原郡大岡山に移転した。東京工業大学『東京工業大学六十年史』、1940年、331-340頁。

11）1893（明治26）年度の入学志願者は331人に対し、入学者は76人であった。東京工業大学『東京工業大学六十年史』、1065頁。

12）山陽鉄道は、1888（明治21）年、神戸で官設鉄道に接続し、山陽道を縦貫するために設立された民営鉄道会社。現在の山陽本線。初代社長は、中上川彦次郎。同年11月、神戸－姫路間の開通を契機として、1891（明治24）年３月に岡山まで開通した。1901（明治34）年５月の厚狭－馬関（翌年に下関と改称）間開業により全通。1906（明治39）年12月、鉄道国有法により買収。日本国有鉄道『日本国有鉄道百年史』第２巻、1970年、553-587頁；同、第４巻、1972年、410-436頁。

13）現行の文京区本郷１～２・４丁目の一部。

14）現行の台東区上野１丁目の一部。

15）手島精一教授。非職文部省参事官兼文部省会計局次長を経て、1890（明治23）年３月に校長として就任。1898年１月依願免官により退職、翌年２月校長に再び任命、1916（大正５）年９月再び依願免官により退職し名誉教授、1918（大正7）年１月死去。『東京工業大学六十年史』、1115頁；東京工業大学編『東京工業大学百年史』通史、1985年、1349-1350頁。

16）商法講習所長、東京商業学校長、高等商業学校初代校長の矢野二郎。

17）阪田貞一教授。1887（明治20）年６月就任、1898年１月から翌年２月まで校長、1916年９月再び校長に任命、1920（大正９）年12月現職のまま死去。東京工業大学『東京工業大学六十年史』、1105頁：東京工業大学編『東京工業大学百年史』通史、1350-1351頁。

18）三守守教授。1885（明治18）年４月就任、1917（大正６）年１月名誉教授、1927（昭和２）年３月退職、1932（昭和７）年１月没。東京工業大学『東京工業大学六十年史』、1128頁。

19）中原淳蔵教授。1856（安政３）年、肥後国山鹿郡中村生まれ。工部大学校を卒業後、山鹿郡鋳物会社社長を経て、1888年第五高等中学校教諭に着任。1890年８月東京工業学校教諭、同年10月同教授に着任。1906年４月熊本高等工業学校（熊本大学工学部の前身）校長を兼任、同年８月東京高等工業学校を退職。1908（明治41）年５月、文部省より九州帝国大学工科大学創立準備委員を命ぜら

れる。1911（明治44）年１月九州帝国大学工科大学教授を兼任、同年４月九州帝国大学工科大学長に専任、機械工学教室機械工学第一講座を担任した。1914年学長を辞任、1921（大正10）年９月に依願退職、1930（昭和５）年12月、75歳で没。「中原淳蔵先生を憶ふ」という熊本高等工業学校教授・遠藤金市の弔辞（熊本高等工業学校編『熊本高等工業学校沿革史』、1938年、329-330頁）には、「先生は校舎内外を清潔にするは衛生上に必要なるは勿論訓育上最も効果ありとなし五六名の女小使として絶えず雑巾を以て校舎内を払拭せしめられ或時は自ら上衣を脱し小使を督励せらること屢々であった。此故に学生も自然感化せられ泥靴は能く掃除して舎内に入る習慣をつけられ清潔は十分に保たれた是等は本校の美風として今に保持されてゐる」と詠まれており、文三の語る中原像と大きく異なる点で興味深い。『東京工業大学六十年史』、1117頁；熊本高等工業学校編『熊本高等工業学校沿革史』、110-111、215-221、328-334頁；作道好男・作道克彦編『九州大学工学部七十年史』教育文化出版、1979年、79、92、112頁。

20）三島通良講師。1866（慶應２）年、武州入間郡生まれ。帝国大学を卒業後、文部省の委嘱で全国の学校の保健衛生の実態を調査。1896年文部省学校衛生主事、高等師範教授となる。日本の学校衛生の生みの親。また帝国痘苗院をおこし、三島式種痘法を広めた。東京工業学校へは1895（明治28）年8月に就任、1903（明治36）年２月退職。1925（大正14）３月、60歳で死去。東京工業大学『東京工業大学六十年史』、1128頁；上田正昭ほか監修『講談社日本人名大辞典』講談社、2001年、1813頁。

21）1921年１月、大日本麦酒株式会社取締役に新任。1924年１月、同社常務取締役に就任。濱田徳太郎編『大日本麦酒株式会社三十年史』大日本麦酒株式会社、1936年、79-80頁。第３次吉田茂内閣・第２次岸信介内閣で厚相・文相を歴任した橋本龍伍は卯太郎の五男、元首相橋本龍太郎、元高知県知事橋本大二郎は卯太郎の孫にあたる。橋本龍太郎『馬越恭平』山陽図書、1976年、261-262頁。

22）1889年７月、福岡県内嘉麻・穂波・鞍手・遠賀・田川５郡からの石炭搬出を主な目的として設立された鉄道会社。主として、現在の筑豊本線、平成筑豊鉄道伊田線に相当。当初は、筑豊興業鉄道と呼称。1891年８月の若松－直方間開業を契機に、翌年10月に直方－小竹間、1893年２月に直方－金田間、同年7月に小竹－飯塚間が開通した。翌年８月社名を筑豊鉄道株式会社と改称、1897（明治30）年10月に九州鉄道と合併、解散。文三は筑豊鉄道に入社したが、退社前の６か月間を九州鉄道で勤務したことになる。日本国有鉄道『日本国有鉄道百年史』第２巻、633-643頁；同、第４巻、562-571頁。

23）内閣官報局『職員録』各年度には、「多々良信止」とある。鉄道国有化後も、九州鉄道管理局運転課、運輸課、門司運輸事務所の技師として勤務した。

24）1896年度の卒業者は、50人。卒業者の進路状況は、技術官吏８人、会社等28人、一年志願兵又ハ兵役10人、就職未定３人、死亡１人という内訳になっている。文三は、会社等28人の１人とみて相違ない。東京工業大学『東京工業大学六十年史』、1065、1076頁。

25）筑豊鉄道の営業報告書に折り込まれた「職員表」によると、汽車課「技士」の人数と月俸総額は、明治30年３月31日調で７人、205円、同年９月30日調で９人、325円であった。１人あたりの月俸に

換算すると、それぞれおよそ29円、36円となり、文三の月俸が新入社員として順当な金額だと判断できる。西日本文化協会編『福岡県史』近代資料編筑豊興業鉄道１、1990年、584、649頁。

26）1897年11月２日「北海道庁官制」の改正（勅令第392号）により、北海道庁に鉄道部が設置され、鉄道の建設・保存・運輸、鉄道の会計、私設鉄道に関する事項が所管事項として定められた。これに伴い、11月５日北海道庁技師の田中冨士太は、汽車課長に発令されている。1900（明治33）年９月の汽車課廃止とともに新設の車両課長に異動。日本国有鉄道『日本国有鉄道百年史』第４巻、188、190頁。

27）幸袋工作所の歴史については、深町純亮「幸袋工作所の百年 ── 石炭と歩いた光芒の軌跡 ──」『エネルギー史研究』第19号（2004年3月）、141-171頁に詳しい。

28）のちに、鉄道院中部鉄道管理局金沢工場長兼金沢運輸事務所技師、岩見沢工場長、北海道鉄道管理局苗穂工場兼工作課技師、東部鉄道管理局（のち仙台鉄道管理局）盛岡工場長を経て、1920年鉄道省監督局技術課技師に着任。内閣官報局『職員録』各年度。

29）1898年４月、旭川に機関事務所・工場を置き、機関事務所に庶務・運転・計算・製表の各科を設けた。日本国有鉄道『日本国有鉄道百年史』第４巻、189頁。

30）栗野は1900年２月工務課長に任ぜられたのち、７月倉庫課長を兼務、９月の工務課廃止とともに新設の保線課長に異動、さらに11月から翌年９月まで建設課長を兼務した。日本国有鉄道『日本国有鉄道百年史』第４巻、190頁。

31）1905（明治38）年３月29日勅令第101号を以て、北海道官設鉄道は逓信大臣の管理下に属された。同月31日限りで北海道鉄道部は廃止、４月１日鉄道作業局出張所が札幌に置かれた。日本鉄道省『日本鉄道史』復刻版、中巻、清文堂出版、1972年、251頁。

32）明治憲法下では、官吏制度について制度全般を包括した単一の法典はなく、個別の法令に記載されていた。内閣制度発足に伴って制定された「高等官官等俸給令」（勅令第６号）、「判任官官等俸給令」（勅令第36号）では、官吏を高等官と判任官に分け、高等官はさらに勅任官と奏任官に分かれた。勅任官の中には、さらに親任式をもって叙任され、官記に天皇が親署し、内閣総理大臣が副署する親任官（大臣級）があった。親任官を除く高等官は９等に分割され、勅任官（次官、局長級）は一等と二等、奏任官（課長以下）は三等以下とされた。勅任官の任免は、閣議決定を経て上奏し、奏任官は内閣総理大臣または所属の各省大臣が奏請するものとし、官記には内閣の印を押し、内閣総理大臣が宣する形式となっていた。判任官は、各省大臣が任免し、官記の形式は各省大臣が専行した。戦前期官僚制研究会編・秦郁彦著『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』東京大学出版会、1981年、663頁。

33）高等官七等十級俸の略。文末の略歴を参照。

34）法的な意味の官吏は判任官以上に限られたのに対して、同じく国の職員であっても、雇員（官吏の補助的業務に従事）、傭人（主として肉体的労働に従事）、嘱託などは、私法上の雇用関係に立つとされていた。戦前期官僚制研究会編・秦著『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』、663頁。

35）帝国鉄道協会内鉄道時報局発行の『鉄道時報』を示す。帝国鉄道協会は、官営鉄道および大小さ

まざまな民営鉄道間の利害調整や意思疎通、情報の共有を図るため、1898（明治31）年に官営鉄道を含む全国の鉄道業関係者により結成された同業者団体。『鉄道時報』は、「鉄道思想ノ普及発達ヲ図リ時々ノ事項ヲ詳悉シ以テ円満ニ本会設立ノ目的ヲ達セン為メ」、毎週土曜日に発行された一般読者向け鉄道専門誌である。同協会は『鉄道時報』の刊行助成に携わることで、鉄道業界全体における情報の共有化と「鉄道員」という職業意識の形成を促進したといわれる。老川慶喜「『鉄道時報』解題」、「鉄道時報」刊行会『鉄道時報』（復刻版）第９巻、八朔社、1998年、所収、ii 頁；中村「帝国鉄道協会の成立」、98、117頁。

36）懸賞文の募集が初めて掲載されたのは、『鉄道時報』第276号（1904年12月31日）である。「今や鉄道界の発展に伴ひ研究改良すべき事項極めて多し、之を具体的に組織して実行を期するは現下の急務なり、本紙は新年初刊より逐次各種の問題を懸賞として大に之を奨励せむとす」というのが、懸賞の狙いであった。

37）『鉄道時報』第277号（1905年１月１日）に、「懸賞論文募集の趣意」が掲載されている。「我邦の鉄道は近時頗ぶる進歩せりといへ雖、之を欧米先進国の夫れに較ぶれば、猶ほ大人と小児との差あり。その革新拡充すべきもの挙て数ふ可らず。左すれば現状に安んぜず、恒に向上発展の方法を講究するは、実に吾人斯業界に在るものゝ責務に非ずや、殊に戦時の折柄最も切要を感ぜずんばあらず。依て弊局は新年に際し、爰に懸賞問題を提出して、聊か斯業奨励の一助と為さむとす。従事員諸君、幸ひに弊局の微意を諒とし、続々応募せらるれば、啻に弊局の光栄のみに非ざるなり。」懸賞論文募集規定は、第１条から第８条まで成る。第１条では懸賞論文題が２種指定されている。ひとつは「(A)本邦鉄道に適切なる貨物の分類及運賃算法に関する改良方案」、いまひとつが「(B)本邦鉄道に適用すべき完全なる列車連結装置」で、注として「若し現式に異りたる装置なれば新旧遷替の際に処する考案を具する事」とある。第２条、第３条はそれぞれ、「応募者の都合にて(A)(B)の二題若くは孰れかの二題に応ずるも妨げなし」、「応募者は封筒に住所を明記し且つ姓名の代りに暗符を適当の場所に記入し置く可し」という内容である。この「姓名の代りに暗符を」の部分で、後述のごとく、文三と鉄道時報局との間で一悶着が起こる。第４条は指定字数を記したもので、「論文は一行二十三字詰とし十二行罫紙五十枚を超過するを得ず」とあるから、13,800字以内の論文だったことになる。ただし、別に図表の添付が許可されていた。第５条は、締切期限を「本年三月卅一日」と定めたが、同月になっても投稿数は少なかったようで、『鉄道時報』第286号（1905年３月11日）の「緊急広告」に「本年五月卅一日まで延期と稟告された。第５条は懸賞金について当選者１名に「(A)(B)各金五十円」を贈呈するとある。第７条、第８条はそれぞれ、「当選論文は鉄道時報に掲載す」、「論文審査に関する委員其他の事項は確定次第発表す可し」という内容である。審査委員は後日発表され、(B)については、工学士畑精吉郎、工学士森彦三、工学士島安次郎、工学士斯波權太郎の４氏に決定した。畑は、1885（明治18）年工部大学校機械科を卒業後、技師試補、神戸汽車課技師などを経て1893年名古屋運転係主任、1896年欧米へ派遣、1899（明治32）年鉄道作業局汽車部長に任じられた。森は、帝国大学機械科を卒業後、1894年鉄道局へ入局、工務課神戸工場技師などを経て1903年欧米へ派遣、1912（明治45）年中部鉄道管理局工作課長兼新橋工場長、翌

年には南満州鉄道株式会社従事員に任じられた。斯波は、帝国大学機械科を卒業後、1894年鉄道局へ入局、工務課新橋工場兼新橋機関事務所技師、鉄道院総裁官房工作課長などを経て、1915（大正４）年鷹取工場長となる。島については、後述の注釈を参照。日本鉄道省『日本鉄道史』復刻版、中巻、82、89頁；中村『日本鉄道業の形成』、206-207頁；内閣官報局『職員録』各年度。

38）高等官六等八級俸の略。文末の略歴を参照。

39）懸賞論文の当選は、『鉄道時報』第305号（1905年７月22日）紙上において、「当選者　北海道上川郡旭川町宮下通四丁目鉄道作業局官舎 B,B,B 生氏」と披露された。ただし、「B,B,B 生氏に対しては氏名聞合せの上（A 号の当選者と）同様贈与することに致候」と、「其氏名至急弊局へ御報知相成度候」と催促されている。結局、次号（同年７月29日）において、「懸賞論文 B 号当選者 B,B,B 生氏は石狩国上川郡旭川町宮下通四丁目鉄道作業局官舎鷲崎文三氏（帝国鉄道協会々員）なる旨七月二十一日附けを以て同氏より通知有之候に付弊局は直に左の賞状に賞金を添へ同氏に発送せり」と、事なきを得た（図２）。

40）当選論文自体は、鷲崎文三「本邦鉄道に適用すべき完全なる列車連結装置」（上）、（下）として、『鉄道時報』第307・308号（1905年８月５日・12日）に実名で公表された。論文の内容は、以下のとおりである。すなわち、本邦鉄道で使用される連結器は、A：中土九州四国及び其附近の島嶼で使用する欧州型の螺旋及び連環連結装置と、B：台湾北海道及び其附近の島嶼で使用する北米型のゼニー式自動連結装置の２方式に大別される。両者の性能を比較する要件は全部で４つあり、①「車輌の連結解放に危険なきこと及び時を費やさゞること」で B 式が A 式に優り、②「車輌の連結の際ショックの患なきこと」で A 式が B 式に優り、③「運転中列車分離の患なきこと」、④「廉価なること」においては優劣がなかった。ここで連結器に比較的必要なことは②よりも①であることから、一般論としては B 式のほうが A 式よりも幾分完全なる連結装置だといえる。だからといって、本邦で使用中の A 式を B 式に変更する必要はない。もし変更すれば、その費用は金銭的に１車あたり160円、北海道台湾以外の全車両数を26,000両とすると総計416万円かかり、時間的にも輸送貨物の停滞を免れえない。したがって、台湾北海道においては B 式を、其の他の地域においては A 式を従来どおり適用すべきであり、A 式を B 式に変更するのは、あたかも鉄道の狭軌を広軌に変更するが如きとして、現実的な意見を提唱した。なお、当選通知書は、改訂版の中に折りたたんで保管されていた（図３）。

41）高山樗牛の本名。

42）1907（明治40）年４月、鉄道作業局は廃止され、帝国鉄道庁が開庁した。北海道帝国鉄道管理局長だった理事・野村弥三郎を指示する。1912年北海道鉄道管理局長、1913（大正２）年東京鉄道管理局長、1916年西部鉄道管理局長、1919（大正８）年神戸鉄道管理局長を歴任。内閣官報局『職員録』各年度；日本国有鉄道『日本国有鉄道百年史』第５巻、235頁。

43）日本鉄道省『日本鉄道史』復刻版、下巻、清文堂出版、1972年、296頁には、「明治四十一年三月上旬ヨリ中旬ニ亘リ北海道線各方面ニ於テ数十年来希有ノ暴風雪起リ積雪八尺乃至十二尺ニ達シ除雪意ノ如クナラズ、三月七日函館本線不通ト為リ翌八日他ノ諸線亦不通ト為リ爾来漸次開通セシモ

長キハ旬日ニ渉リテ運輸ヲ障碍シ同月十七日全通シタリ」とある。

44）北海道岩見沢市栗沢町の行政字「茂世丑（もせうし）」を意味すると思われる。

45）島安次郎。1894（明治27）年東京帝国大学卒業後、関西鉄道に入社。1901年、同社を辞し、逓信省鉄道局に入り、鉄道国有化の準備に従事。1908年鉄道院の運輸部工作課長となり、車輌行政の最高幹部として車輌の進歩発達に尽くした。(文三が「工作局長」と述べているのは「工作課長」の誤りだと思われる。鉄道院が局制を導入したのが1913年、工作局の設置が1915年である点も、踏まえておきたい。）1910（明治43）年にドイツへ駐在、1912年帰国後、再び工作課長の職に就き、車輌行政を主宰。1915年鉄道院理事、工作局長として車輌機械方面の最高幹部となる。また同年、広軌鉄道改築取調委員会の委員として、「軌幅変更とこれに伴う車輌の改造のみをできるだけ短い期間に実行し、他の改良は運輸の発達に応じて漸次計画を立てて実施すべきである」とする「改主建従」の方針を唱えたが、1918年に誕生した立憲政友会原敬内閣による「建主改従」政策により、島案は実施されるに至らなかった。同年鉄道技監となるも、翌年国有鉄道から退職、満鉄理事に就任。1934（昭和９）年、汽車製造株式会社の取締役社長に就任。1941年同社退任後、車輌統制会会長に就任。1946（昭和21）年２月、77才にて死去。のちの日本国有鉄道理事で、新幹線開発に大きく携わった島秀雄は、安次郎の長男。朝倉希一「島安次郎先生の事業」、『日本機械学会誌』第51巻第352号（1948年1月)、20-23頁；戦前期官僚制研究会編・秦著『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』、122、386頁。

46）平井晴二郎。金沢藩士平井貞三の次男として生まれ、開成学校を中退、明治８年文部省留学生として工学修業のため５年間アメリカに留学。帰国後、開拓使御用掛、工部権少技長、農商務少技長、北海道庁二等技師などを経て、1890年北海道炭鉱鉄道会社技術長、1892年同社理事となる。1894年逓信省鉄道技師に任じられた後、鉄道技監、鉄道作業局運輸部長、鉄道作業局長官などを歴任し、1907年帝国鉄道庁総裁、翌年鉄道院設置により副総裁に就任した。同年から1926（大正15）年まで貴族院議員を務めた。日本鉄道省『日本鉄道史』復刻版、中巻、92頁；同、下巻、7、20頁；戦前期官僚制研究会編・秦著『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』、192頁。

47）下富良野線（現・根室本線の滝川－下富良野（現・富良野）間）と十勝線（現・根室本線の落合－帯広間）を示す。下富良野線は、1913年11月、十勝線は1907年９月に営業を開始した。これにより、滝川－釧路間が全通となり、北海道内陸部および本州線と北海道東部地方との重要な連絡線となった。日本国有鉄道『日本国有鉄道百年史』第６巻、1972年、58-62頁。

48）旧池北線（池田－北見間）と現・石北本線（北見－網走間）に相当。野付牛（のっけうし）（1942（昭和17）年10月に北見と改称）までは1911年９月、網走までは翌年10月に開業。日本国有鉄道『日本国有鉄道百年史』第６巻、62-64頁。

49）野付牛に運輸事務所及保線事務所が置かれたのは、1918年４月１日。日本鉄道省『日本鉄道史』復刻版、下巻、61頁。

50）現在の広島県福山市大門町。

51）現在の熊本県宇城市三角町。

52）現在の熊本県阿蘇郡南阿蘇村河陽（かわよう）栃木にある温泉。

53）８代藩主鍋島治茂が1781（天明元）年、佐賀城下松原小路の相良十郎太夫屋敷跡に「文武稽古場」を創建した藩校。同年暮、「弘道館」と命名された。藩政のための人材養成を目的としたと考えられる。10代藩主直正は、1840（天保11）年、北堀端の一部に移転、拡充し、翌年には江戸屋敷の経費を節減して学館経費を増加するという積極的な教育政策を実施した。こうした弘道館教育の成果が発揮された結果、副島種臣、大隈重信、江藤新平、中牟田倉之助など多くの傑出した人材がここから輩出したといわれている。佐賀市史編さん委員会編『佐賀市史』第２巻、446-448、464-465頁。

54）1872年、弘道館は学制制定によって一旦廃校となったが、1874（明治７）年に勧興小学校として再興、専ら藩士の子弟を就学させた。1890年に勧興尋常小学校と改称、学区域を定めて一般子女の就学を認めた。1913年現在地に新校舎を落成し、翌年移転した。1941年に勧興国民学校、1947年勧興小学校と改称、今日に至る。佐賀市立勧興小学校ウェブサイトより「学校沿革」http://www2.saga-ed.jp/school/edq10101/enkaku/enkaku01.htm（2010年９月９日検索）。

55）1915年から1917年まで総裁官房研究所長に任じられた。同所は、鉄道用品の試験、鉄道博物館、「業務研究資料」の発行を分掌とした。日本鉄道省『日本鉄道史』復刻版、下巻、53頁；日本国有鉄道『日本国有鉄道百年史』第５巻、261、267頁；戦前期官僚制研究会編・秦著『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』、386頁。

56）原典は年号・月を漢数字で記載するが、読みやすくするために算用数字を用いた。

57）同年２月の「帝国鉄道協会会報」に、「住所変更届　上川郡旭川町宮下通４　鉄道部官舎」と掲載されている（中村尚史の帝国鉄道協会会員名簿データベースから引用）。

58）同年の「帝国鉄道協会会員名簿」には、「準会員　住所：上川郡旭川村　鉄道部官舎」とある（中村尚史の帝国鉄道協会会員名簿データベースから引用）。

59）『鉄道時報』第418号（1907年９月21日）の「叙任辞令」に掲載されている。

60）同年の「帝国鉄道協会会員名簿」には、「正会員　鉄道院技師　住所：札幌区北８条東２」とある（中村尚史の帝国鉄道協会会員名簿データベースから引用）。

61）北海道鉄道管理局運転課技師（内閣官報局『職員録』明治45年度）。

62）北海道鉄道管理局運転課兼運輸事務所技師（内閣官報局『職員録』大正２年度）。

63）北海道鉄道管理局運輸課兼札幌運輸事務所技師（内閣官報局『職員録』大正３年度）、北海道鉄道管理局釧路運輸事務所長（同、大正４年度）。

64）西部鉄道管理局運輸課技師（内閣官報局『職員録』大正５年度）。

65）鉄道省門司鉄道局熊本運輸事務所長（内閣官報局『職員録』大正９年度）。

[九州大学大学院経済学研究院　准教授]